フェンリルさん頑張る

けんしょ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フェンリルさん頑張る

【Ｎコード】
Ｎ６７７２Ｚ

【作者名】
けんしょ～

【あらすじ】
村でのんびりと生活してた青白い琅・佐藤凍（さとうこおる）はフェンリル（笑）である。転生者（笑）でもある。
色々とあって村を出ることになった彼はとりあえず頑張ろうか？の精神で生きていく。旅を共にする幼馴染は若干壊れているがなんとかならないか？　ならないな。

1話　旅は唐突に（前書き）

魔法の無いファンタジー考えてたらこんな話になりました。
魔法はないけどトンデモ武器はあるよ？

1話　旅は唐突に

獲物を発見した。
俺が居る木の真下、木の根元に蠍みたいな青白い魔獣が居る。鋏の先には猫耳の兎が捕えられている。動かないってことは死んでるみたいだ。
今日は大漁だな。
蠍を見下ろしていた木から蠍に向かって飛び降りる。蠍が俺に気付く前に空いている鋏を爪で貫き地面に叩き付ける。
急なことに反応できない蠍の顔にパンチ。
と言っても俺の手でパンチしようものなら爪で突くような攻撃になる。頭の骨ごと脳らしき柔らかくてグニャッとしたものを貫いた。
蠍は一瞬ビクッと体を痙攣させて動かなくなる。兎はやっぱり死んでいるようでそのまま俺の食料決定だ。
今日は中々のご馳走だな。特に蠍の尻尾は火で軽く焙るとプリップリの海老みたいな食感と味、仲間内で取り合いになる前に食わねば！

俺は人里離れた森に住む氷狼族。幻琅族と呼ばれる狼の1種族だ。
体格的にはもののけ姫の子狼を連想してくれ。あれで青白い毛だと思ってくれれば大体あってる。毛にしては硬くて人間曰く氷殻らしい。モンハンみたいなネーミングだがこの世界にリオレウスなんて飛竜は居ない。似てるのは居る。
さて自己紹介を続けよう。佐藤凍（さとうこおる）、オス、１６歳。俺のプロフィールだ。
ファンタジーの名前じゃないって？　知らん。人間はニーナとかジョンとか呼ばれているのを聞いたことがあるが魔獣の名前でそんなのは聞いたことがない。友達には山田花子なんてのも居る。

俺の住んでいる村は森の奥深く、人間が入って来れないような場所にある。森の浅い範囲にはゴブリンが生息していてよく人間と小競り合いをしている。少し深く森に潜ろうとすればキングゴブリン（５メートルくらい）がダッシュで追っかけてくる。ちょっと前に人間の大部隊が討伐に来たらしいが全滅したと聞いた。
誰に？
ゴブリンの友達に。

それでもどうにかゴブリンを出し抜いて森の中腹に入ると今度は昆虫系の魔獣に襲われる。特に評判が悪いのはワームだ。ヌメッた芋虫みたいな見た目で人間丸呑みにするような魔獣なんだが気持ち悪がられると傷ついてショボーンとする。ちなみに山田花子だ。
繊細で傷つきやすい奴なので優しく接してあげてほしい。魔獣は見た目じゃないんだよ！

さて、興奮した頭をちょっと冷やそう。
爪に氷を纏わせて冷えピタ代わりにする。お～、冷たくて気持ち良い。
落ち着いたところで村が見えてきた。今日は隣村から幼馴染が来ている。
あいつなら蠍の尻尾も上手に焼けるだろう。ちゃんと焼いてくれたら半分くらいは分けてやろう。

「ただいま」
「あっ！　お前なんで村に居なかったんだよっ！　速く村長の所行ってこいよっ！」

近くに居た見張り係に挨拶したら怒られた。
俺が狩りに出るのは昨日の内に話してあったはずなんだけどな？
理不尽に怒られてる気がしてならないが何も言わずに村長の家に向

かう。狩った獲物は村長の家に行く途中で俺の家に置いていった。
親に食われそうだったから尻尾だけは食わえていった。
これだけは譲れん！

「こんちわー。村長、見張りからの伝言で来ましたよー」

村長の家の前で扉をノックしてから来客だと伝える。『待ってろ』
と村長が言い終わる前に扉が凄い勢いで内側から開く。
咄嗟にバックステップで直撃は避けたが村長宅から俺に向かって飛
び出してきた影までは避けきれなかった。

「ひっさしぶりー！」

飛びかかってきたのは炎のように紅くてフワッとした毛並みの狼。
炎狼族の林焔（はやしほむら）、１６歳、メスだ。
林が燃えてしまうとか言うツッコミはなしで。一部のオスは萌えて
しまうらしいが、俺の幼馴染です。
炎狼族とは爺さんの代まで敵対関係にあったが今の村長同士が無益
な争いに終止符を打ってからは隣村ということで仲良くやっている。
今では氷狼と炎狼のハーフまで居るくらいだ。

「会いたかったよ、凍～！」

グイグイと顔をすり寄せてくる。オスとしては嬉しいが正直離れて
ほしい。焔の親父さんがモノっ凄い笑顔でこっちを見ている。ただ
し目は笑っていない。
口パクで何か言っている。

『後で山裏来いや』

絶対に行きませんとも。

「再開を喜ぶのはその辺にして中に入れ。乳繰り合うのは後にしろ」

威厳のある声に焔がピシッと背筋を伸ばして俺から離れる。
声の主は氷狼族の村長、年は５４と中々年寄りだが未だに負け知らずのトンデモ爺さんだ。
さて、俺が呼ばれたのは他でもなく焔が居るからだろう。焔は俺くらいの年の奴らからかなりのアプローチを受けている。その護衛係が俺だ。
幻狼はどの種族も『好きな相手は力尽でモノにしろ』と考えているから焔は結構襲われる。そんなとき白羽の矢が立ったのが同世代では腕も良く、焔を襲わない（焔が襲われても良いと言った）俺だったので親父さんの頼みで焔が村に来た時の護衛をしているのだ。
睨むな、理不尽だ。

とにかく村長宅に入る。
机の上には鍋とスープが置かれている。キッチンから人化した村長夫人が人数分の皿とスプーンを持ってきた。

「さっさと人化して席に着け」

幻狼族は狼の姿から人間の姿になれる。と言っても髪は俺なら青白くてストレート、焔は紅くてフワッとしている。これが人間とは大きく違う特徴だろう。
村長に言われたとおり人化し席に着く。

「さて、凍、お前に命令がある」

１６歳に何を頼む気だ（魔獣は大体１８で成人）。

「炎琅族の村に行け。雷琅族との抗争が本格化したら、子供たちを守れ」

「明らかに荷が重過ぎるっ！」

思わず叫んでしまった。まさか子供にそんなこと頼むとは思わなかった。

「まあ待て、話は最後まで黙って聞け。質問は後で聞く」

今直ぐ断りたい。

「何もお前だけというわけじゃない。お前はあくまで予備の予備。本当にどうしようもなくなった時に子供たちをこの村に案内するだけだ」

追っ手の雷琅がロリコンだったらどうすんだよっ！　てか雷琅ってオスもメスも繁殖に積極的だって聞いたぞ？　下手したらショタコンに狙われるっ！？

「ちなみに今の雷琅族は同性での行為が流行っているらしい。精々掘られんように気を付けろ」

余計心配になったわっ！

てか気を付けなきゃなんないのはメスじゃなくてオスかよっ！

せめて綺麗なお姉さんに襲われたかったよっ！

「凍、お前の幼馴染の村が雷琅に蹂躙されるかもしれないのだ。幼

馴染の不安を少しでも和らげようという気概はないのか」
「そんな気概はホモレズ話で吹き飛んだ」

どうせなら焔とお姉さんの絡みを眺めたいくらいだ。美少女がお姉さんにアフンアフン言わされている光景……アリだな！
逆に自分が野郎に掘られている姿……吐きそうだ！

「腑抜けが。だがこれは決定事項だ。この村にお前の帰る場所は無い」
「この悪徳村長っ！」
「では細やかだが宴を開こう。氷琅と炎琅との協力を祝してな」

この会話に焔や親父さんは終始無言だった。ちょっと気まずそうだったのが腹立たしかった。

2話　旅路はイベントに（前書き）

前回の荒筋：村から追い出されました

2話　旅路はイベントに

翌日、本当に俺は家から追い出され隣村に行くことになった。
他にも炎琅の村に行くことになった奴は結構居るみたいだったが、同年代のオスは皆焔が狙いみたいだ。目的分かってんのか疑問だが言っても始まらない。

昨日の宴の間はやけ食いして気分を紛らわせていた。焔は何度も俺の方に来ようとしていたがオスたちに足止めを食らって中々来れないようだった。
俺は他の肉を食ってから尻尾を焙ろうと火を探していたら焔に捕まり、仕方なく仲良く尻尾を分けあった（殻ごと炙って中には熱だけ通すのがポイント）。
狩ったのは俺だが炙ったのは焔だ。食い物は狩った者にも調理した者にも食べる権利がある！　というのが俺の持論だ。
俺と焔が一緒に尻尾を食い始めてから嫉妬の視線が凄かったのは思い出したくもない思い出だ。

で、森の中。
先頭は親父さん、次に焔、俺。その後ろに氷琅が3匹（オス2のメス1）。これだけの戦力なら人間の国の1つや2つは簡単に落とせるが無意味な上に時間と体力の無駄なので誰もしない。
大体人間を襲ってもメリットが無いのだ。食える部分は少ないし美味くもない。人間を襲っても何も得られないのだ。

「凍は私たちの村に来たことないよね？」

思い出してみると焔はよく氷琅の村に来たが俺が炎琅の村に行ったことはなかった。

「じゃ案内するよ！　何から行こうかな？」

おーい、俺はＯＫ言ってないぞ？　まあ断る理由もないし案内してもらうか。どうせ俺は狩りくらいしかすることないしな。

「あ、そう言えば凍ってお風呂大丈夫？」

「水浴びじゃなくてか？」

「うん、熱湯」

「温度による」

「じゃあ試そう！」

「はいはい」

暑いのは苦手だが、まあ何とかなるだろう。

炎琅の村までは歩いて3日はかかる。その間、焔に群がるオスたちが色々と不安だが村長が選んだんだしそこまで酷いことにはならない……と信じたい。

その夜、持ってきたゴザを広げると焔寄ってきた。さっきまでは唯一のメス同士で野宿の準備をしていたのだがどうしたのだろうか……いや、分かってるよ。そんじょそこらの鈍ちん主人公と同類扱いは御免だ。

何も言わずにモジモジしているところを見ると俺の予想はかなり正解に近そうだ。焔の後ろではメスが木陰から覗くフリして俺に無言の圧力をかけてくる。

これは俺が悪いのか？

「どうした？　眠れないのか？」

『一緒に寝るか？』などと言ったら間違いなく親父さんはキレる。
あくまで焔から言ってもらわないと俺の命が危ない！

「えへへ……やっぱり、不安みたい」
「当然だろ。さっさと寝ようぜ」

ゴザにもう1匹なら寝れるスペースを開けて横になる。これなら焔が自分から入ってきましたと言い通せる！
ちょっと自分が情けないと思った。

翌朝、習慣で日の出と共に目が覚め周りを観察する。普段だったら見慣れた自分の部屋だが今日は外でゴザを敷いただけなので木が乱立する森の中だ。
さて、誰も起きていないようだし今の内に離れて……人化した焔が俺の前足を握って離さない。
……どうしよう？
仕方ないので焔の顔をペシペシ叩いて起こす。
人化は便利だが俺たちくらいの年だと上手く制御できずに耳や尻尾が残ったり、寝ている間に変わってしまったりするのだ。耳と尻尾だけなら獣人と言い貼れる。
人化する回数が多い奴ほど寝ている間に人化しやすいらしい。
俺は人化することはできるが滅多にしないので寝ている間に人化した経験はない。
人化する際は何故か服を着た状態になる。人間は普段から服を着ているからだろうと村長は言っていた。人化はできるが何故できるのかは誰も知らないのだ。
ちなみに服を脱いで狼に戻ると毛が少し薄くなるらしい。試したこ

とないから分からん。

「ぅ～……おはよ」

「おはよう」

ようやく起きた焔はまだ俺の前足を握ったままだ。

あ、親父さんが起きる。早く離せ。

「おはよう、お父さん」

「おう……朝飯食ったら行くか」

離してもらえなかった。

親父さんの視線怖いな。

朝食の干肉を仲良く分け合って出発。炎琅の村まであと2日、それまで親父さんに殺されないように細心の注意を払わなければ俺は死ぬ！

焔が気を付けるだけでもかなり安全なのだがそうは問屋が卸さない！

昨日1日で俺は学習した。焔は親父さんの視線に気付いてない。

焔、前から思ってたけど、お前鈍すぎ。

昔から襲われるまで相手の気持ちに気付いてなかったんだな。そりゃオスたちも襲うなんて強行手段とるって。アタックしても気付いてもらえないんじゃ分かり易いことするしかなかったって。肯定する気はないけどな。

「あの崖道を北に進む。踏み外して落るなよ」

森が晴れた先は断崖絶壁になっていた。この崖沿いに進むと向こう側に渡れる橋がある。橋と言っても大木を倒しただけだが。

下を覗いてみるとかなり深いことが分かる。ついでに崖の下は激流だとも分かった。

落ちたら人生終了のお知らせか……怖っ！
まあこんな場所で幻琅の一団に喧嘩売るような馬鹿は……

目の前に殺気立った6本足のカマキリ（体長2メートル）×5

居たよ。と言うか俺の思考がフラグだったよ。なんでこんな時にこんなフラグ立ててるんだよ。多脚だからこんな足場でもヘッチャラなんだぜとか卑怯臭いよ。てか虫が狼に喧嘩売るとかヒエラルキー無視し過ぎだよ。そして俺のツッコミ長いよ、多いよ、現実逃避止めろよ！

「何でこんな所にっ、邪魔だ！」

先頭の親父さんが『キシャーッ！』とか威嚇してくる目が赤く発光しているカマキリに飛び掛り頭を噛み砕く。
でも親父さんは何に驚いたんだ？
って、あっ！　カマキリの脳はカニ味噌みたいで美味いんだぞ！
それをグチャ味噌にするなんて勿体ない！

「やりやがったなっ！」

親父さんに群がるカマキリの内の1体を横から突き飛ばし、倒れたところで首だけ切り離す。氷の爪は鋭くて便利だ。
焔は炎を纏った体当たりで1体倒したみたいだな。首は無事のようだ。

「なっ！」

一瞬で自分たちが不利になって驚いたか？　だがまだだ！　カマキリ味噌の美味い食べ方を模索するためにもお前達には犠牲になって

もらう！

「おいっ、どうしたっ？」

……森から一杯カマキリが来てしまった。正確には何体かって？
一杯だよ！
緑色だから森に同化して見えづらかったんだろうな。湧いてくるとしか言いようのない増え方だ。
後ろは崖、前はカマキリ一杯……積んだな。
幻琅族には竜族が使うブレスなんて便利なものはない。氷にしても炎にしても纏うだけで飛ばせない微妙に使いづらい能力なのだ。人間はそれすらできないのだからマシだと思おう。

「凍、どうしよう？」
「……逃げるしかないな、それもバラバラに」

固まってたら狙い撃ちにされるだけだ。多分運の良い１匹くらいが生き残れるだろう。
……意味無いな。

「やだ」
「却下だ」

林親子に駄目言われてしまった。どうしろと言うのだ。

「相談は終わったかよ？　ええっ！」

リーダーっぽいのが声を荒らげてズイっと前に出てくる。ちなみに他の３匹と分断されてて様子が分からない。きっと俺たちと同じ状態だろうから気にしてもどうにもならないな。

「仕方がないな」

お、親父さん妙案があるのか？

「凍、焔のこと任せたぞ」

「は？」

何を言ってやがるんだ？

そう思ったら親父さんは炎を纏わせた前足を地面に向けて叩き付けて、

ピシッ、ガラガラガラガラ

崖崩しやがったーっ！！

「アホーーーーーっ！」

「きゃあああああああっ！」

激流に落ちる前に見えたのは親父さんがカマキリに突撃する姿だった。

2話　旅路はイベントに（後書き）

今回の纏め：親父さんがトチ狂った

3話　放浪は出会いに（前書き）

前回の荒筋（嘘）：とうとう姿を現した魔王が勇者たちにその毒牙を伸ばす。次々と倒れる仲間を前に勇者は目の前の3択に悩む。

逃げる

逃げる

逃げる

勇者たちの明日はどっちだ？

3話　放浪は出会いに

崖下の激流に飲み込まれてしまうと狼の体では上手く動けない。犬掻きくらいならどうにかなるが焔と離れないようにするのが難しい。だから俺は人化して焔を掴まえた。向こうも人化した。
親父さんの無茶な判断で一緒にされたが1匹より2匹の方が良いに決まってる。不安に押しつぶされて自滅なんて笑えないからな。

「凍っ、あっちに岸がある！」
「間に合うか？」

とにかく泳ぐ。岸に着く前に通り過ぎても壁沿いならば何かあるかもしれない。

「凍っ、後ろ後ろ！」

今度は何だ？
木の幹だった。
って無茶だろっ！　何で慣れない人間の姿で激流の中泳いで木に直撃コースなんだよっ！
まあ誰に文句を言っても状況は変わらないわけだが。
仕方ないので焔を庇って木の直撃に耐える。超痛い。
流れてきた木に人化した状態で上に乗る。狼の姿だと大きすぎるんだよ。人の姿だと丁度良い。
ズブ濡れで木の上に這い登るとようやく一息つけた。色々ありすぎで疲れた。

「……どうしよう」

焔が不安そうに呟く。
濡れた服は体に張り付いて細いが健康的な体のラインを晒している。
焔って人化しても美少女なんだよな。
今はそんな場合じゃなくて！
激流の先を見る。
これだけ流れが速いってことはもしかして滝か？
予想的中、少し行ったらメッチャ開けた風景が見える。完璧に滝になってるな。

「焔、滝だ。はぐれるなよ」
「えええええええええええっ！？」

それくらい気付いてくれ。
焔を抱き寄せしがみつく。これ絶対勘違いされるなと思うがそうも言ってられない。向こうも内心はどうあれ俺にしがみついてくれた。
これで離れ離れにならないといいんだが、ここまで来ると賭けだな。
そんな風に考えていたら滝に入口が見えてきた。あと3秒くらいだ。

「凍、絶対離さないでね」
「お前もな」

激しく揺らされながら滝壺に飲まれた。

……生きてる？
生きてるよな？
ガバっと立ち上がり周囲を警戒する。人間や魔獣が近くに居たら襲われかねない。

……居ないみたいだな。
滝壺がプライベートビーチみたいになっててかなり広い。パラソルとチェアさえあれば南国気分を味わえそうだった。
焔が居るのは分かってた。互いに相手のことを離さなかったらしい。
幼馴染万歳！
焔の顔をペチペチ叩いて起こす。何かデジャブ。

「ぅ～……凍っ！」
「おはよう」
「あ、おはよ。じゃなくてっ！」

言いたいことはわからんでもないが、正確には汲み取れないな。俺は鈍いってわけでもないけど鋭いって程でもないし。

「う～、もういいよ。それよりも、ここどこだろう？」
「分からん。とりあえず人化したままで探索しよう。人間に見つかると面倒だ」

魔獣なら相手が誰だろうと攻撃する時はするけどしない時はしない。でも人間は俺たち幻琅を見つけたら必ず攻撃してくる。
御伽話なんかでは心優しい女性が怪我した魔獣を治療して仲良くなるなんてのもあるが、そんな奇特な人間がそうそう居るはずもない。
とりあえず焔に炎を纏ってもらい服を乾かす。

「私たちだけになっちゃったね」
「そうだな」

実は焔はオス恐怖症と言うか、オス限定の潔癖性みたいなところがある。そりゃ何度も襲われたらなるか。俺はメスに襲われたことはないから分からないが。

どうせイケメン成分少なめですよフンッ！

「でも、一緒に居るのが凍で良かった」

で、襲わなかった俺に懐いた。美少女に懐かれるとかちょっと犯罪の臭いがするな。俺のことだけど。

「そりゃ光栄だ。さ、行こう」

ここをプライベートビーチにしたいとは思うが今は無理だ。ここは仕方なく諦めてやろう。

「うんっ！」

そ、そんな嬉しそうな顔したって襲わないんだからねっ！
普通のことだっての。てか野郎のツンデレとかキモいな。自重しよう。

ふと思う。俺たちの髪は青白いストレートと紅くてフワッとしたロング。この髪じゃ人間から相当怪しまれると思う。
何度か森の浅いところで人間を見たが黒、金、赤、茶くらいしか見たことがない。
もしかして、人化してても襲われる？
人間って面倒だな。

まあ俺も元は人間なんだが。

ファンタジーの世界の狼が『もののけ姫』を知ってる訳がない。ツンデレなんて単語皆知らないしな。
それ以前に自分の名前と人間の名前を比べて不思議がることなんて

まず有り得ない。生き物って自分の環境に疑問を持たないものらしいぞ？　俺は学者じゃないから詳しくは知らないけど。
まさか部活中に熱中症で死ぬとは思わなかった。再発防止運動とかしてくれると嬉しい。あのクソ顧問に対して復讐になるから。
俺って根暗。

「凍、このまま帰れなかったらどうする？」

……考えてなかった。

「私はね、凍と一緒ならなんでも良いよ」

美少女にこんなこと言われたら堪りません！　何もしないけどなっ！
そこっ、ヘタレとか言わない。
どこぞのファミレスの厨房バイトは４年も同僚のフロアチーフにノーアタックだったんだからなっ！
自分が何を言ってるのか分からなくなってきた。全然関係ないこと言って誤魔化そうとしたけど意味不明になっただけだったな。

「はいはい。それより鼻で同族の場所が掴めないのが痛いな」
「もう、いつもそうなんだから！」

テキトーに流したら怒られてしまった。
今そんなこと話してる余裕ないから！　それどころじゃないから！
まずは安全を確保しないとな。
１６年も狼として生きてると人間の美少女より狼の美少女が良くなるから不思議だ。人間だった頃にはできなかった動物の見分けも今では簡単だしな。
ってまた脱線してしまった。
は～、もう最初に会ったのが魔獣なら村への戻り道聞く、人間だっ

たら同行して幻琅の情報集めて村に戻る。これでいいや。
昔から計算した行動とか後先考えるとか苦手だったしこんくらいで丁度良いだろ。焔は……今の状態じゃ何聞いてもまともな答え返ってこなさそうだ。

「最初に会った奴に幻琅の情報聞いて、それを元に村目指すって方針で良いか？」

一応聞いてみる。

「うん！　それで良いよ！」

あ、何も反論ないのな。後先考えなさすぎなプランだったから人間は避けようとか昆虫系の魔獣避けようとか言われると思ってたんだけどな。

「凍のしたいようにして。私はそれに従うから」

何か依存されてる？　まあ俺以外のオスに懐かない時点でそんな気はしてたけど……止め止め、考えたって答えなんて出ない。
あ、森抜けるな。人間が作った街道がある。

「おらおらっ！　出すもん出せよ！　金も飯も女もだっ！」

何か豪華な馬車がボロボロの服着た男達に襲われてる。

3話　放浪は出会いに（後書き）

今回の纏め（嘘）：勇者は自分の力不足を嘆き新たな力を得るために旅に出た。霊峰と呼ばれるドラゴンに巣に伝説の破魔の剣があると聞き向かうがあまりの寒さに仲間の魔法使い見習いに頼むことにした。

魔法使い見習いの活躍にこうご期待

4話　王族は協力者に（前書き）

前回の荒筋（嘘）：知恵と勇気で破魔の剣のある霊峰の頂上まで来た魔法使い見習いは震えていた。自身の目の前のドラゴンの圧倒的な存在感に。自分を無理矢理霊峰に放り込んだ勇者に色々と言いたいことがある魔法使い見習いの前には3択が用意されていた。

さっさと逃げて勇者をシバク

ドラゴンに頼んで勇者をシバク

破魔の剣で勇者をシバク

麓の村でヌクヌクしている勇者の明日はどっちだ！

4話　王族は協力者に

鎧を着た人間が何人か倒れてる。鎧の隙間から矢の羽の方が見えてるな。ご愁傷さま。

「くっ、山賊風情がっ！　隊列を乱すな！　盾部隊は周りと協力して守れ！」

1人だけ装飾が違う鎧の人間が怒鳴りながら指示を出している。騎士の隊長か何か？

「馬車にゃお姫様が居んだ。お前等、今日は楽しむぞっ！」

「「「おおおおっ！！」」」

分かり易い動機だな。

「凍、見つけちゃったよ？」

顔近づけて可愛らしく言わないでくれっ！　まさか最初に会うのが山賊と人間の国の王族だなんて思わなかったんだっ！

王族なら幻琅についての情報も簡単に集められるか？　しかしアングラな情報なら山賊も負けてないかもしれないし……悩む。

とりあえず様子見だな。どっちも俺たちのこと攻撃してきそうだし。

山賊と騎士団（？）の戦いを眺めていると山賊が優勢だと分かった。武器に毒を塗っているみたいで掠り傷しか負ってない騎士が少ししたら急に動きが鈍くなる。その隙を突かれて殺されている。

しかも騎士の弓兵は真っ先にやられたみたいで山賊に遠距離から好き放題攻撃されている。

これはお姫様終わったな。
残りの騎士は3人、山賊は9人。
馬車の中に居るとしても2人くらいだろう。前衛に釘付けにされてる間に弓で攻撃されて終わりだ。
すると馬車から誰か出てきた。ここで援軍出しても遅いだろ。
出てきた人間は騎士とは明らかに違う高級感溢れる服を着ていて、金髪碧眼でレイピアを持っていた。慣れた動作で山賊に向かってレイピアの切っ先を向ける。

「私はキスタニア王国第3王子、ギルバート・キスタニアだ。山賊共、相手をしてやろう」
「男かよっ！」
「「「男かよっ！」」」

王女じゃなかったのかよ！　しかもイケメンかよっ！
……はっ！　しまった、つい大声でツッコんでしまった！
山賊も騎士も王子とやらも俺たちの方を見ている。こっち見んな。

「親方っ、女が居ます！　女！」

あ、焔に気付いた。

「おっしゃーっ！　野郎どもっ、馬車はハズレだったが女は居たぞっ！　今夜は寝かすなっ！」
「「「おおおおおおおっ！」」」

何だか凄く馬鹿な光景を見てる気分だ。

「彼らを守れ！　一般人を巻き込んだとあっては騎士の恥だ！」

「「「おおおおおおおっ！」」」

元気だな。とりあえず焔の手を引いて逃げる。
戦っても良いが人間じゃないとバレると面倒なことになりそうだ。
山賊だけなら1人だけ残して殺せばいい。情報提供者って大事だよな。
問題は騎士だ。王子殺したら捜索隊が編成されてどっかで足止め食らいそうだし生かしておいたら礼がしたいとか言い出しそうだし…
…関わらないって無理か？

「今日は大胆だね」
「そんな甘酸っぱい展開じゃないだろ！」

焔さん超呑気。多分人間が触ろうとすれば灰になる程の炎を纏う気なんだろうな。それやると目撃者消すのが面倒なんだよな……でも1番確実か。
考えることを放棄して追ってくる山賊の方を向く。短剣で切りかかってくる山賊の右腕を氷の爪で切り落とす。
俺に向けて放たれた矢は避ける前に炎を纏った飛び蹴りで焔が消し去った。
山賊の絶叫が森に響く。

「ば、化物だ！」

人間には炎も氷も扱えない。一応転生者の俺から見て魔法のような攻撃はあるのだがよっぽど強い奴が最終手段のように使っているのしか見たことがない
あれは今だになんなのか分からん。
そんな風に考えごとをしながら体を動かしているといつの間にか山賊は全滅していた。鋭利な刃物で切られている者、炎で焼かれた痕

がある者など死に方は2通りだ。
そんでもって騎士と王子にその一部始終を見られた。
うわ、騎士たちは化物見る目だけど王子はｗｋｔｋした顔にしか見えない。この変態め！

「そこの娘、私の嫁になれ！」
「死ねば？」

随分と短いやり取りでした。

「きっ、貴様！　王子に対して不敬であるぞっ！」

あ～あ～、隊長っぽい人が凄い怒ってるよ。マスクの下じゃ顔真っ赤だろうな。

「何言ってるの？　私はその人が統治してる土地の住人じゃないんだから敬意なんて払わないよ。あなただって自分とは無関係の統治者に敬意なんて払わないでしょ？」

騎士たちがポカーンとしてる。あんな風に正論言われたらどうしようもないか。

「くっ、ははははははっ！　益々気に入った！　見た目ばかり着飾って内面を磨かない浴の塊のような女には飽き飽きしていたのだ！　おい娘、どうしたら私のモノになる？」

あいつ、焔をモノ呼ばわりしたか？
……それにしても王族の男って女に苦労しないのな。こちとら前世の１３年間で彼女が居たことがないからその辺の機微が分からん。

「死んでくれたら1秒くらい悲しんであげる。2秒で忘れるけど」

何とまあ、思いやりのない優しさだな。

「ふっ、どう足掻いても死ぬしかなさそうだな。この話はここまでにしておこう。

さて、私を助けてくれたのだ。礼くらいさせてくれ」

「凍、どうする？」

お約束！　そしてここで俺にフルな！

騎士たちが『え、来るの？』的な視線になってるし、隊長に至っては『王子の申し出断るなんて有り得ないよな？』と訴えている。王子はライバル見るような感じだし焔は心底どうでも良さそう……四面楚歌？

「じゃあ幻琅の情報くれ」

城に招待するなんて言われたら堪ったもんじゃないから当初の予定通り幻琅の情報を聞くことにした。

「ほう、面白い要求だな。私としては城に招待して食事でもと思っていたのだが」

「そんな堅苦しくて居心地の悪い礼は迷惑だ」

「ふっ、そうれもそうだな。あのような格式張った場所では礼にならん。だが生憎私は幻琅の情報を持っていない。すまんな」

「幻なんて言われているんだ、そう簡単に見つかるとは思ってない」

さて、どう探したものか。

「だがそう言った情報が手に入りやすい場所ならば心当たりがある

ぞ」

お、有力情報？

「ギルドに入れば魔獣の情報も聞けるだろう。紹介状と寝床の確保くらいはしてやるぞ」

つまり焔のところに通いやすくしたいんですね、分かります。分からねえよ！

思わず1人ノリツッコミしてしまった。

「ギルドに入るには紹介状が必要なのか？」

「有ったほうが怪しまれないというだけだ。お前たちの髪は目立ちすぎるからな」

確かに。こんな怪しすぎる2人組の素性を効かない辺りこの王子踏み込む距離は上手く測ってくるタイプみたいだな。人間の髪に青白いとか紅いとかないからな。

「では、王都に行くか。付いてくるかはお前たち次第だ」

4話　王族は協力者に（後書き）

今回の纏め（嘘）：激しい戦いのさなか、魔法使い見習いとドラゴンは確証のない信頼を互いに感じていた。そして戦いが終わったときドラゴンは驚愕の事実を話すのだった。

「え、破魔の剣は５００年前に折れたけど？」

「えええええええええええええっ！」

「それよりも、お前が気に入った！　結婚しよう！」

「えええええええええええええっ！」

異種族間の恋の行方はどっちだ？

5話　出会いは武器に（前書き）

前回の荒筋（嘘）：竜に告白された魔法使い見習いは破魔の剣が壊れたと知り意気消沈。失意の中霊峰を降りたら勇者が待ってて聞いてきた。

「その赤毛、誰？」

まさか竜が一緒に来るとは思ってなかった魔法使い見習いに勇者が言った。

「竜居たら破魔の剣なくても平気だろう？」

魔王と戦わされそうな竜の明日はどっちだ？

5話　出会いは武器に

王子と会ってから1時間くらい歩くと王都が見えてきた。ちなみにもう夕方。
道中の王子の話だと王都の中央に見える低いモンサンミッシェルみたいなのが城らしい。塔2つってかなり面倒じゃないか？
まあ塔同士は近いし間に空中通路みたいなのもあるから平気なのかもしれないな。

「王都に着いたら宿を確保するぞ。ギルドの登録は明日にする」

確かに今からだと説明とかが終わったら真夜中になってしまう。それは面倒だ。

「王都キスタニアの大通りには街灯が設置されていて夜でも外出できる程度には明るいが、やはり昼よりも問題が起こりやすいからな」

今日明日の金は出してくれるらしい。あと俺たち用の家も用意してくれると言っていた。焔への下心を隠そうともしない対応だな。ん？　隠してなかったら下心とは言わないのか？
どっちでも良いな。

王都の入口に居た見張りは王子の連れということで俺たちのことはスルーした。王族万歳。
中世ヨーロッパみたいな石畳の街並みにオサレな街灯が等間隔で並んでいる。パトロールの騎士が果物屋のオバチャンと気安く挨拶しているところを見ると治安は良さそうだ。しかし騎士は鎧で一般人はジャンパーとかチェックのシャツやパーカーってどんな文明レベルなんだ？

相場よりもちょい安の宿を騎士に紹介してもらい明日迎えを寄こすと言われた。と同時に王子が騎士から金の入った袋とシンプルな指輪を2つ受け取って俺たちに渡してきた。
金は分かるが指輪は何だ？

「キスタニアの王族はいつ誰に助けられてもきちんと礼ができるように目印を常備するのだ。その指輪は私を助けた証というわけだ」

ちゃんと通じるんだろうな？　お役所仕事で知らない奴が多かったりするイメージがあるんだが。

「あ、王子。何でウチの前に？」

何か宿から体格の良いオバチャンが出てきた。しかも王子に対してかなりフレンドリーだ。

「ああ、私の恩人を泊めて欲しくてな。部屋は空いているか？」
「2人部屋なら空いてるよ。晩飯まで少しあるけどどうするんだい？」
「ならば武具でも見に行くとしよう。その部屋は空けておいてくれ」
「はいよ。若い男女が同じ部屋～っと」

あ、王子の表情が曇った。オバチャンはニヤニヤしてる。勘鋭いな。そして焔はしょっちゅう俺と一緒に寝るぞ。狼の状態でだが。
やっぱ人間と狼じゃ価値観違うな。

オバチャンに挨拶してから王子に連れられ武器屋と防具屋が並んでいる通りへ。
しかし武器か……俺も焔も武器使わないから剣とかかえって邪魔なんだが。攻撃されても幻琅の体って人間の鎧より丈夫だから防具も

意味ないしな。

「お前たちは剣など使わないみたいだがそれでは怪しまれる。最低限の装備はしておいた方が良いぞ」

心遣いには素直に感謝して武器を見る。剣にナイフ、斧に槍、ハルバートなんかもあるな。遠距離武器では弓やボウガンに銃……銃！？　何か急におかしな物が出てきたぞ。

それも拳銃サイズからライフルサイズまで色々だ。

実はこの世界の武器にはどれも宝石みたいなのが付いている。魔石と呼ばれる魔獣の糞だ。これが無い武器は魔獣にダメージが通りづらい。色は様々だが属性がどうこう言うわけではない。ただ魔獣の体内で固まる成分の色が違うだけだと言われている。詳しいことは知らん。

ちなみに魔石の力が切れたら交換する必要がある。武器を持っている人間は大体自分の武器に合う魔石を2個くらい常備しているらしい。そもそも魔石の力はよっぽど使い込まないと切れないから交換するのは年に1回くらいだと聞いたことがある。

「あのボウガンの隣に置いているのはなんだ？」

「銃だな。小さい物は弓やクロスボウよりも小さい動作で使えるが射程は２０メートルもない。逆に大きい物は射程が長く威力も高いが狙いが難しい、完全に狙撃用だ。他にも放射状に弾が出る散弾なんかもあるが、これは近距離用だな。

ついでに言うなら普通は年に1度の魔石交換が半年に1度は必要になると言われている」

燃費悪いな！

「王子、その知識はちょっと古いぜ。ここに置いてあるのは改良型

で１０ヶ月に１度くらいだ」

店主のオッチャンが訂正を入れてきた。半年から１０ヶ月って大分伸びたな。

あ、この銃は、

「坊主、その銃に惹かれたのか」

「ああ」

俺が惹かれた銃はリボルバーみたいなデザインの拳銃タイプだがバレルが分厚くて衝撃に強そうにできている。何故か俺はリボルバーが好きだった。あの回転弾倉にどうしようもなく惹かれるのだ。どう考えてもデザートイーグルのようなマガジンタイプの方が装填の効率は良いと思うのだがこればっかりは好みの問題だ。まあ玩具の銃すら持ってなかったがな。

「オッチャン、この銃って殴ったりしても壊れないか？」

「そいつは殴ることを想定して作られた銃だ。ちょっと離れた距離も攻撃できる棍棒みたいなもんだぜ」

オッチャンがニヤリと俺を見ている。

まさか銃衝術用の銃をこの目で見れるとは思わなかった。漫画の世界の産物だと思ってたからな。

「代わりに射程は１５メートルだ」

「弾は単発か？　変えられたりするか？」

「今は単発にしてるが、一応変えられるぞ」

「威力を低くする代わりに散弾みたいにできないか？」

「何ぃ？」

俺は玩具の銃すら撃ったことがないからまともに当たるとは思えない。そもそも普通の銃としての機能を望んでない。
弾はあくまで牽制、メインは格闘で良い。そもそも人目がなかったり敵味方全滅させるだけなら武器なんて無い方が良い。だからこれは俺の趣味。今まで漫画やアニメで使われてきた戦術を俺が試したいだけだ。

「……3日だけ待ってろ。それまでに坊主の望む調整をしてやる。クックックッ、楽しみにしてろよ」

良い数字だ。技術者根性を刺激したみたいだがこの際だ、俺の趣味に付き合ってもらおう。最後ちょっと不安な笑い方だったが……気にしたところで何もできないのだから好きにやらせておこう。

「凍は武器決めたんだ。私も決まったよ」

オッチャンの妻と思われるオバチャンと話してた焔が選んだ武器を持って寄ってきた。何を選んだんだ？
ん？　普通の剣だよな？
でも何か突き刺したら抜けなさそうな返しが刀身一杯に付いている。扱いづらくないか？

「こうするとね、」

持ち手を少し捻りながら剣を振るうと刀身が少し離れ、鞭のような軌道を描き元の形に連結した。
蛇腹剣かよっ！　この店色物多くないかっ！？　個人的には法剣（テンプルソード）でも可！　どうせなら焔には修道服を着てもらいたい！

「あれを一発で使いこなすとは末恐ろしい嬢ちゃんだな。坊主とい

い嬢ちゃんといい何者なんだよ、王子」
「私も詳しくは聞かなかった。だが、面白いだろう？」
「へっ、そりゃそうだ。人の素性なんざ面白さの前にゃ無意味だったな」

ちょっとは気にしろ。有難いけどな。

5話　出会いは武器に（後書き）

今回の纏め（嘘）：南の島でバカンスしてる師匠を迎えに行った魔法使い見習い。竜と勇者もついてきて正直、鬱だった。船を乗り継ぎようやく師匠の下に着いたてみたら師匠は水着でキャッキャウフフ。

「クタバレ糞師匠！」

後に竜は語る。

「やはり魔法使いではなく格闘家だな」

魔法使い見習いの正体やいかに！

6話　登録は衝撃に（前書き）

前回の荒筋（嘘）：４人パーティー揃った勇者一行。魔王との再戦を決意していざ魔王城へ！　と思ったら魔王の方が勇者たちの前に現れた。

「正直魔王やるのが面倒になった。何か面白いことはないか？」

色々言いたいことはあるが魔王の『面白いこと』が想像できない勇者たちは人肌脱ぐことにした。

劇を見る。

海で遊ぶ。

世界征服。

世界の明日はどっちだ？

6話　登録は衝撃に

武具を選んだ翌日、俺たちは王子に連れられてギルドに来ていた。
来ていたんだが、

「趣味悪いな」
「凍、帰ろう」

建物がマゼンタ９０％なのだ。この建物デザインした奴頭おかしいんじゃないか？　恥ずかしくて入りたくないんだが。

「いいから入るぞ。入らなければ何も始まらん」

王子も嫌そうな顔だが入るよう促してきた。
昨日選んだ武器は調整をするらしく手元には無い。だが慣れておくに越したことはないと言われ同種の武器を渡されている。
俺は銃身が分厚いリボルバーを２丁、焔は腰に吊るした鞘に蛇腹剣を収めている。
防具はあってもなくても変わらないのだが王子が面白半分に防具屋で選んだ。
この世界の防具は魔石を装備していれば普通の服でも鎧としての役目を果たす。鎧に魔石を装着すればさらに固くなるので騎士団はそうしているだけだと言う。

で、俺は両腰にホルスターを装備して前の締まった白いロングコートみたいなのを着ている。焔が着ているのは修道服を動きやすくしたような服だ。
あの蛇腹剣、本当に法剣（テンプルソード）と呼ばれる教会御用達の武器の１つだったらしい。ちなみに俺の服も教会の戦闘員が着ている物に近いらしい。

紛らわしいんじゃないかとも思ったが本職は背中に大きな円模様が入るらしい。
教会についての説明は分からないからしない。その内詳しく聞くこともあるだろう。

嫌々ギルドに入る。
扉までマゼンタだなんて、心が折れそうだ。マゼンタじゃないのは精々看板くらいだ。窓枠までマゼンタな辺り徹底しすぎててむしろ清々しい。
だが中に入って安心した。年期の入った木製の建物は西部劇のバーのようだが、荒んだ様子はない。事務所兼バーと言った雰囲気だ。
王子が迷い無くカウンターに進んでいくので後に続く。
周りから俺たちを見ている冒険者たちの視線は友好的ではないが敵対的でもない。本当に観察してるだけって感じだ。

「新人2人だ。登録を頼む」

王子がカウンターに居るアゴヒゲがダンディーな筋肉隆々の男に話しかけた。落ち着いた雰囲気の男はゆっくりと俺たち2人を見てから口を開いた。

「オッケーよ～ん。じゃあこれに書けるとこだけ書いてね～」

出オチ！　初っ端の落ち着いた雰囲気が台無しだよ！　この見た目でオネエとか勘弁してくれよっ！　もう色々と残念過ぎて辛いんだよっ！

「凍、やっぱり帰ろう。他の方法探そうよ！」

是非そうしたいです！

「だが恐らくここでなければお前たちの欲しい情報は手に入らないぞ。こんな見た目だが腕は一流だしな」
「失礼しちゃうわねっ、私は男として男が好きなのよ！」
なお悪いわっ！

「と言うのは冗談で、普通に妻も娘も居るわよ。こんな私を受け入れてくれた大切な家族がね」

良い台詞のはずだけどギャグにしか聞こえない。見た目と話し方のギャップが強すぎて引いてしまう。こんな人、空想の中にしか居ないと思っている時期が僕にもありました。

「さっさと書いてしまえ。私はそろそろ公務に戻らねばならん」

仕方がない。もう色々と諦めて書くことにしよう。
え～と、項目は、

名前――コオル・サトウ
年齢――１６歳
何かコメント――

項目少なっ！　これだけかよっ！？　もっと色々書き込むもんじゃないのかよ！？
漢字だと違和感あるからカタカナで書こうって焔と決めてたけどまさかここまで何も書かないとは思わなかった。

「はいは～い、終わったのね～。コオルちゃんにホムラちゃんね。
何々、コオルは私の嫁

あら、大・胆・ねぇ」

シナを作るな色気を出すな息をするな読み上げるな口を開くな俺を見るな今直ぐ書き直させろっ！
焔も何を書いてんだよっ！

「コメントって言うからつい」
「絶対コメントの意味違うからな！」
「アリよっ！」

アリなのかよっ！？

「じゃ、ランクの説明をさせてもらうわね。
ギルドに所属している人は冒険者って呼ばれるわ。冒険者の証の指輪は後日渡すわ。ちなみにギルドってのは旅をしてたり身分証明のない浮浪者なんかでもなれる審査も無しのとんでも組織よ」

自分で言っちゃったよ。

「ありとあらゆる人が寄せてくる依頼を階級に応じて振り分けてるの。依頼の内容も千差万別でね、魔獣の駆除から日曜大工までなんでもあるわ。
でも殺しだけは厳しい制限があるの。殺しの対象は重犯罪者や危険な山賊みたいな死んでしまった方が良い人たちだけ。傲慢かもしれないけど王都に害を為す危険人物にまで優しくすることはできないわ」

シビアだな。死刑執行者みたいだ。

「階級についてだけど、D、C、B、A、Sの5階級よ。

Dは登録したての初心者。雑用みたいな依頼を１０個ほどこなすとCランクよ。魔獣の討伐なんかはこの階級からね。Cランクの依頼を２０個ほどこなすとBランクになるわ。この階級になると山賊や逃走中の危険人物なんかを相手にすることになるの。
で、問題はここから。AランクとSランクには人数制限があるのよ。Aは２０人、Sは5人ね。
年に1回Bランクの上位４人とAランクの下位４人、Aランクの上位４人とSランクの1位以外で戦ってもらって入れ替えが行われるの。
Dランクの貴方たちにはまだ関係ないしBランクになるときに確認するから覚えてなくても大丈夫よ。
あ、言い忘れてたけど自分の階級よりも上の依頼は受けられないから気を付けてね。下の階級の依頼も月に受けられる上限があるから受けすぎちゃダメよ？」

最後にウインクされてしまった。
キャー恥ずかしー。
……調子に乗ってすいませんでした。

「じゃ、早速依頼しても良いかしら？」
「大丈夫だ」

昨日王子が教えてくれた話ではBランクにならないと強力な魔獣の情報は入ってこないらしい。Aランクになって目立つのは御免だからBランクを目指す。
焔はどうでも良いと言っていた。こいつ村に帰る気すらないな。

「診療所からの依頼でね、薬草を取ってきてほしいんですって。これが薬草の外見と生えてる場所よ。欲しい数と報酬はそこに書いてあるから行きながら見ておいてね」

メモを渡された。結構親切だな。

「じゃ、よろしくね～」

やっと恥ずかしい建物から出れた。

さて、行くとするかな。

6話　登録は衝撃に（後書き）

今回の纏め（嘘）：面白いことが見つからない魔王は不貞腐れて魔王城に引き篭ってしまった。毎日毎日グータラしてる魔王に業を煮やした配下たちは勇者一行にお願いをした。

「魔王様を前のキリッとした状態にもどしてくだされ」

本末転倒？　意味不明？　そんな魔法使い見習いを置いといて勇者たちと魔王の配下の交渉は進んでいく。そして魔法使い見習いは決意した。

「魔王、ボコそう」

魔王の明日はどっちだ？

7話　昇格は始まりに（前書き）

前回の荒筋（嘘）：働かない魔王をボコッて茶番を終わらせようと考えた魔法使い見習い。勇者と師匠には反対されたが竜はノリ気で再告白までしてきた。それに焦った勇者と師匠も加わって打倒グータラ魔王に燃える一行は魔王と対峙した。

「何故人間に害を為さない魔王が勇者に狙われるのだ？」

魔王のもっともな疑問は魔法使い見習いが面倒臭くなったからだとはだれも思わない、本人以外。

今、勇者パーティーＶＳ魔王の戦いが始まりそう。

7話　昇格は始まりに

ギルドに登録してから2日、俺と焔は雑用のような仕事をこなしてCランクになった。本当に雑用だったのは最早笑った。
雨漏りの修理に消えた鞄の捜索、悪ガキグループの抗争仲裁まで手広くやった。

「ギルドって、大変だね」
「魔獣と戦う方が楽ってのも変な話だな」

本音である。仲裁は本当に面倒だった。最終的に両方に拳骨落として正座させて2時間説教してしまった。
周りに被害を出しておいて『部外者は口を挟むな！』とは良い度胸だと思う。
焔が『凍、カッコイイ』とかキラキラした目で言ってたのは見間違いだと思うことにした。

「今日は採取とかの依頼にしとこう」
「そうだね」

あのマゼンタな建物に向かう。行きたくないが行かねば仕事が無い。
人間は何で貨幣なんて面倒な社会システムを作ったんだ？
王子が前に言っていた寝床だが、王都の外れにある空家を提供してもらうことになった。書類の関係上まだ無理らしいが明後日には移れることが決まった。
宿のオバチャンが凄く残念そうな顔をしていた。焔は男やオスは駄目だが女やメスには好かれるのだ。

ギルドに到着。何か張り詰めた空気だな。

依頼の貼ってあるボードを見る。この前行った森の更に奥にある薬草がほしいとの依頼があった。これなら適正ランクだし受けても構わないだろう。

「リーガル、この依頼受けれるか？」

「大丈夫だ、問題無い」

口調が違うっ！？　誰だこの渋いダンディーなオジサマは！　オネエなリーガルはどこ行ったっ？　そしてそのネタはこの世界のものじゃないぞ！

あ、今更だがギルドのカウンターに居たオネエはリーガルという名前だった。あれでギルド長なのだから恐ろしい。

しかし今日のリーガルはおかしい。表情も心なしかキリッとしている。バーなら女性客で満席になりそうな程に渋くてカッコイイ雰囲気だ。

「こ、凍、この人誰？」

「俺が聞きたいくらいだ」

あまりの事態に喉がカラカラになる。

ギルド全体に漂っていた緊張感はこれか。皆リーガルの変貌に戸惑っているのだ。何がリーガルをここまで変えてしまったのだろうか……

「パパー！」

ん？　可愛らしい女の子が嬉しそうにリーガルに走り寄っていく。

「どうしたんだ？」

「ママが今日の晩ご飯何が良い？って！」

「ははははっ、ママの作る物は何でも美味しいから悩んでしまうな」

ちょっ、おまっ、その幼女お前の娘かよっ！！　そして普段とのギャップが激しすぎてそろそろ限界だ！！

「焔、森に行くぞ。これ以上ここに居るのは危険だ！」

「うんっ、早急にここを出よっ！」

俺たちは自分の心を守るためにギルドを後にした。脱出直前、適正な依頼を受けれずにギルドに残っていた冒険者が泣きそうだったのが印象的だった。

しかし危なかった。下位とはいえ竜種と戦ったときよりもここまでの危機感は感じなかったぞ。流石、元Sランクは伊達じゃないということか。幻狼種2頭を同時にここまで追い詰めるなんて人間の歴史上初なんじゃないか？

調整が終わったという武器を受け取ってから件の森に到着。やはり森は良い、リリンが生み出した文化の極みだ。文化じゃねえよ！

またしても1人ノリツッコミしてしまった。口に出してないからセーフだろう。

さて、今日は武器を試してみるか。狼は食事以外で無駄な殺しはしない。しかし向こうから向かってくる奴だけは相手をする。そのスタンスさえ守っていれば良いだろう。

焔と頷きあって森の中を進んでいく。

「……凍、森の動物たちが変だよ」

焔の言う通り、猿種も昆虫も何かに怯えたように大人しい。森の浅

い場所ならまだしも中腹まで踏み込んだら普通睨むくらいはしてくる。
昔村の近くにワイバーンが来たときと同じだ。つまりこの辺にヤバイのが居るってことか？

「もしかしたらヤバイのが居るのかもな。警戒しろ」
「うん！」

「クルルルルルルルルルルッ！」

「「っ！」」

遠くから聞こえた異質な叫びに2人してビクッとしてしまった。
聞いたことのない叫び方だ。初見の魔獣か？
声のした方に注意しながら進む。遠目だが宙に浮いた黒い何かが見える。
アレが声の主だろうか？　何かと戦っているみたいだ。そして俺たちと同じように遠くから観察して近付いていっている人間が居る。

「凍、戦ってるの、雷琅族だよ」

マジかよ、ここで幻琅に遭遇とか運が良いんだか悪いんだか微妙なとこだろ。でも焔の血の気の失せた顔を見る限り冗談って訳じゃなさそうだ。
戦ってる4つ足の奴をよく見る。黄色くてツンツンした毛並みで俺の狼形態より少しだけ大きい。美少女とみた！
電気を纏わせた太い前足で黒い水の塊みたいなのを殴り飛ばした。
殴られた方は帯電しているのか断続的にバチバチいっている。

「しつこいのよっ！！」

それでもダメージが通っているようには見えない。本当に水を殴っているんじゃないかと思えてきた。よし、黒スライムと呼ぼう。
それにしても、もしかして耐久力の高いスライムか何かか？　いやいや！　あいつらって浮くのか？

そんな風に考え込んで出ていかなかったのが不味かったのか、雷琅が黒スライムに飲み込まれた。
雷琅は苦しそうに藻掻くがどう見ても無意味だった。苦し紛れに電気を全身に纏ったが黒スライムは無反応だった。
苦しそうに気泡を吐き出し、とうとう雷琅は動かなくなってしまった。そして黒スライムがどんどん小さくなっていく。
もしかして、

「雷琅の中に入っているのか？」
「え？」

思わず呟いていたらしい。焔に俺の仮説を聞かれたみたいだ。だがそれが直ぐに当たりだと分かる。
黒スライムが雷琅を覆いきれなくなり、最後には雷琅の口の中に消えていったからだ。
グッタリと地面に倒れた雷琅だったが、少ししたら起き上がった。
目が合う。

それはもうバッチリと目が合った。しかも雷琅の目は赤く発光している。
よく輝くような目とか言うがマジで光ってる目なんてこの前のカマキリ以外で初めて見たな、なんて場違いなこと考えて現実逃避していたが中断させられた。

「コソコソ隠れてないで出てきたらどうだ？　目が合ったのに知らぬ存ぜぬはないだろう」

声はそのままだった。

観念して対峙する。本当は狼形態になりたかったが人間が隠れている前で戻るなんて自殺行為だ。

そして焔まで出てきてしまった。雷琅の様子を見ると気付いてたみたいだし仕方ないか。

「あと1つは、人間か。言葉が通じないとは不便だな。では、お前たちの後に食うとしよう」

本当に、お約束すぎるだろ。

7話　昇格は始まりに（後書き）

今回の纏め（嘘）：熾烈な勇者たちの攻撃をどうにか避けて逃亡した魔王。追ってきた勇者たちに崖に追い詰められたが竜の不用意な攻撃で魔法使い見習いと海に落ちてしまった。目が覚めれば洞窟の中、魔法使い見習いと一緒に困る。とりあえず一時休戦して出口を探そうと決めた2人は互いに手を取り合って洞窟を進む。そして魔王は思った。

（こいつと一緒に居ると感じる胸の高鳴り、これが、恋？）

竜と勇者と師匠と魔王に想われる魔法使い見習いの明日はどっちだ？

8話　遭遇は闘争に（前書き）

前回の荒筋（嘘）：洞窟内で寒気を覚えた魔法使い見習い。魔王の方を見てみれば優しさに満ちた目で自分の方を見ている。敵相手にどうなってるんだと頭を捻ったが答えは出ない。ならばと直接魔王に尋ねてみた。

「共に洞窟を出れたら言う」

勇者たちと合流したらその場で再戦する気の魔法使い見習いからすれば随分と余裕の態度に見えたわけで、

「絶対に負けない！」

「何の意気込みだ？」

奇妙な2人の明日はどっちだ？

8話　遭遇は闘争に

「人間の道具に頼るなどっ！」

飛びかかってくる雷琅を左右別々の方向に避けて挟む。
どうも最初とは口調が違う気がする。最初は普通にメスの口調だったのが今はオスの口調っぽい。

「いっけえーっ！」

焔が抜き放った法剣の刀身が鞭のようにしなって雷琅を切る。鞭の軌道を描く斬撃に戸惑った雷琅はほんの少しの傷に驚いた様子だ。
そりゃ打撃だと思ってたら斬撃だったんだか驚くか。

「面妖なっ！」

俺もやるか。
俺用に調整された2丁拳銃を腰から抜く。同時に雷琅に走り寄りながら乱射する。
注文通りに射程は短そうだが放射状に弾が発射され、至近距離だった雷琅に全弾命中。殴れる距離まで近付いたところで殴打する。

「飛び道具で殴るだとっ！」

飛び道具舐めんな！　某ハンターゲームのボウガンはちゃんと殴れるんだからなっ！
反撃とばかりに振るってきた爪をバックステップで避けながら銃を乱射、側面からは焔が法剣を連続で振るっていた。
圧倒的（2対1）じゃないか我が軍はっ！　言ってみたかったんで

す。

「くっ、このっ！」

ムキになって攻撃が雑になり反撃され余計ムキになる。完璧に悪循環に陥っている。

でも何か弱い者苛めみたいで罪悪感あるな。

幻狼の戦闘力は人化していようが狼だろうが基本は同じだ。多分雷狼の戦闘力は俺より少しだけ低い程度、焔は俺と同じくらい。雷狼が爪や体当たり、噛み付きしか攻撃方法がないのに俺と焔は中距離からでも攻撃できる。

……完全に弱い者苛めだな。

「なあ、もう止めないか？　間合いが違い過ぎるぞ」

「五月蝿いっ！」

「ゴガツバエいっ！」

「は？」

「何でもない」

何となくやってしまった。いつも思うんだ、あの特殊な読みは何なんだ？　小鳥遊（タカが居なくて小鳥でも平和に遊べる場所）と同じようなものか？

「それよりもお前は黒スライムなのか？　それとも雷狼のメスなのかどっちだ」

「黒スライム？　ああ、俺は雷狼ではない。この雷狼の体はもらったがな」

「そうか。だけど俺も雷狼には用があるんだ、出ていってくれ」

出れんのか？　出れなかったら食材になってもらおう。幻狼種の肉

なんて中々口にする機会ないしな。

「はいそうですかと出ていくとでも思っているのか？」
「出なかったら殺して焼いて食べる」
「……何だ、その脅しは？」
「脅しじゃない。俺の趣味だ」

何か馬鹿を見る目で見てるな。実に不本意だ。

「凍、あんなの食べたらお腹壊しちゃうよ！　そんなに食べたいなら私のこと食べていいから、ね？」

焔にお姉さんぶった口調で注意されてしまった。いくら俺でも知り合いを殺して食べる趣味はないんだが？

「その顔は通じてないね。しょうがない、あの黒いのには雷琅から出ていってもらわなきゃね」
「そう簡単に、」
「黙っててよ」

焔が法剣を一閃し雷琅の口を閉じさせた。
容赦無いな。

「私は今、凍と話して、るんだよ？　部外者は、口を挟まないで、ほしいな？」

言葉を区切る度に法剣の切っ先が雷琅を襲う。
あれ、おかしいな。焔って炎琅なのに周りの気温が下がった気がするぞ。

「たかが寄生虫の分際で態度がデカイよ、虫は虫らしくクシャっと潰されてなよ」
「ぎゃあああああっ！」

焔が炎琅としての能力で法剣に炎を纏わせ雷琅に振るった。その軌道は今までのように単純な鞭のものではなく、１振りで何度もヒットするような複雑な動きで雷琅に迫り、全方位から蹂躙した。
え、そんなことできんの？　もしかして俺も銃に氷纏わせたりできる？　氷の散弾とか超やりたいんだけど。

そんな妄想に浸っていたら雷琅の口から黒スライムがフヨフヨと出てきた。また動き出す前に焔が焼き切った。両断された黒スライムは煙みたいに霧散し、消えた。
電気を纏った雷琅のパンチは平気で焔の法剣（炎付き）は駄目なのか。もしかして炎が弱点なのか？

「凍、終わったよ」
「そうだな。お疲れさま」
「うんっ！」

さっきまでの冷たい笑顔ではなく普通の明るい笑顔。
良かった、俺氷琅だけどあの寒さは耐えられなかったんだ。

「さて、コイツには色々と聞かないとな」
「え？　何を聞くの？」
「いや、雷琅なんだから炎琅の村の情報何か持ってるかもしれないだろ？」

忘れがちだが、元々俺が村を出る羽目になったのは雷琅と炎琅の抗争が本格化するかもしれないからだ。それに雷琅から炎琅の村まで

の行き方が聞ければそこから氷琅の村に戻ることもできる。焔に案内してもらえばいいだけだからな。

「そうだった。お父さんのこととかすっかり忘れてたよ」

白状だな、おい！　最近の子供はみんなこうなのかね？　全く世界はどうなってしまうのか。俺もその代だっつの！

お約束の1人漫才も終わったところで雷琅を起こすか。そしてこっち覗いてた人間は……いつの間にか逃げたな。臭いで追えるかと思ったけど強烈な香水を一帯に撒いたのか鼻が利かん。

「おい、起きろ」

とりあえず雷琅を揺さぶる。

起きない。

「凍、私が起こすよ」

んじゃ頼むとするか。焔相手ならペチペチ叩くんだが他のメスにはやっちゃいけない気がする。なんとなくだが。

「ほら、起きて」

ガスッ！

「ゴフッ！」

ん？　何かバイオレンスな光景を見たような気がする。

「もう、起きない気かな？」

「お、起きたわっ！　起きたわよっ！」
「あ、おはよ」
「え、ええ、おはよう」

何だか顔が引きつってるな。狼見知りするタイプなのかもしれないな。何だこの造語？

「なあ、あんた雷琅だよな？」
「え？　ああ、そうよ。そう言うあんたは氷琅であの娘は炎琅ね」
「そうだ。で、聞きたいんだが雷琅は炎琅と敵対してるのか？」

親父さんと村長にはそう聞いたけど俺は自分の目で見たものじゃないと自身が持てないから確認する。
本当に敵対していて襲ってきたらさっきみたいに2対1に持ち込めばいい。正々堂々なんて自然界では通じません！

「ふ～ん、聞きたいの？」
「ああ、是非聞きたいね」

何かを企むようないやらしい笑みだ。美少女だけどお近付きになりたいタイプではないな。

「なら私のペットになりなさい」
「お断りだよっ！」

俺がツッコミ入れる暇が無かっただとっ！？

「私のご主人様は凍だけなんだからっ！」

何だろう、雷琅より焔にツッコミ入れるべきな気がしてきた。

「ならペットのペットはどうかしら？」

俺はペットになる気は無いぞ？

「なら良しっ！」

良いのかよっ！

「さあさあ、知りたいことがあるのなら私のペットになりなさい」

もしかしなくても、俺は凄く馬鹿なことに関わってるんじゃないのか？

8話　遭遇は闘争に（後書き）

今回の纏め（嘘）：ようやく洞窟を脱出した2人、魔法使い見習いは魔王に優し気な視線の理由を聞いた。

「魔王が人間を好きになってはいけないと決まっているのか？」

突然の告白に戸惑い反応できなくなってた魔法使い見習いの唇は魔王によって奪われた。丁度良いタイミングで2人を見つけた勇者たちの目の前で。勇者たちには3つの選択肢が見えた。

魔王を殺す

魔法使い見習いを殺す

乱交する

勇者たちの倫理観の明日はどっちだ？

9話　飼い主は家に（前書き）

前回の荒筋（嘘）：何やら恋の5角関係になってしまった魔王と勇者一行。困った魔法使い見習いを師匠は優しく慰めようとするが周りはそれを許さない。考えた師匠は言いました。

「よし。魔法強化月間にしよう」

師匠と弟子という立場を利用した師匠は魔法使い見習いに修行と称して手取り足取りな濃密スキンシップを開始しようとしたが？

師匠が危険人物な魔法使い見習いの明日はどっちだ？

9話　飼い主は家に

いきなりペットになれとか言い出した雷琅は渡辺雷（わたなべあずま）と名乗った。幻琅は基本的に相手のことを名前で呼ぶので雷（あずま）と呼ぶことにする。

「じゃあ雷は炎琅との戦いに反対だったんだ？」

「ええ、大人のオスたちのプライドに巻き込まれて怪我をするなんて馬鹿馬鹿しいでしょう？」

「あはは、確かにマイナスにしかならないよねっ」

焔と雷は直ぐに打ち解けたようで何よりだ。ソリが合わなくて第２ラウンド開始とかは勘弁してほしい。

さて、今日から俺たちの住処はオバチャンの宿ではなく王子が用意した郊外の空家になる。１度下見に行ったら清掃業者と思われる人間たちが忙しなく出入りしていたから中は綺麗だろう。家具も運び込んでいたし寝床に関しても問題はなかった。

そう、なかったはずだ。雷が居なければ。

今日はソファで寝ることになるな。

「じゃあ焔って凍と同じ部屋で寝てたのかしら？」

「うん。でも何にもしてこなかったんだよ？」

「ヘタレね」

「根性無しだよねっ」

好き放題言ってくれるな。てか焔、俺たちはお互いまだ子供だぞ？

もし子供できちまったらどうすんだよ？　この世界には避妊具なんて無いぞ。

「きっと子供ができても面倒見るだけの覚悟が無いんだから作っち

ゃ駄目だ、とか思ってるのでしょうね」
「だよねっ」

バレテーラ。
しかしこれは俺のプライドの問題だ。それ相応の覚悟も無しに軽はずみな行動はしたくない。何が起こるか分かっているのだったら尚更だ。この辺がヘタレなんだろうな。

「でもラッキーだったわ。まさかペットが宿住まいから一軒家に移るその日に出会えるなんて」

これが雷が俺たちについてきた理由、こいつホームレスだった。そして俺はペットになった覚えはない。
ちなみに雷も人化している。人間の国入るのだから当然だ。
焔を暖かくてフワッとした印象の美少女とするなら雷は鋭くてキリッとした印象の美少女だった。髪は毛先の揃った黄色。
プチハーレム万歳と声高に叫びたい！　が、雷は俺への好感度が低いのでハーレムにはギリギリでなってない。なっても困る。俺はそういうのは1人が良い。1度に何人もと言うのはどうも抵抗がある。
どうせヘタレですよっ！

「ここが俺たちの住処だ」

王都に入って10分ほど歩いた人気のない郊外にある一軒家。２０年くらい前までは貴族の持ち物だったらしいのだが没落して手放し、残ったのがこの館だ。
元々10人くらいで住むのを前提にしているものなので2人では大き過ぎる。だから雷が来るのを気軽に許可できたのだ。
ちなみに依頼はちゃんと達成して報酬ももらった。雷には待っていてもらったがな。登録は明日にする。変わり果てたリーガルを見て

いるのが辛かったんだよ。
さて、入るか。
掃除の跡が真新しいドアノブを捻り、両扉を開く。

「「くぱ、」」
「言わせねえよっ！」

まさか2匹揃って下ネタカマしてくるとは思わなかった！　そしてこの世界でこんなツッコミする日が来るとは思ってなかったよっ！
てか最近やたらツッコミの回数増えてるんだけど何か言うことはないか？

「「「おかえりなさいませっ！」」」

本日最高のツッコミ所来たっ！　館の中にメイド軍団とか何の冗談だ！　あの王子何してくれやがるっ！

「帰ったか、待ちくたびれたぞ」
「出たな元凶！」

この王子に会ってからろくな目に合わない。人間の前で能力使う羽目になるし妙な武器に出会うしメス雷琅にはペットになれとか言われるし焔はぶっ壊れるし！　……焔は元からだったな。

「何の話だ？　で、その娘は新しいお前のコレか？」

手の甲俺に向けて小指立てんな！　俺はキツいメスは苦手だ。焔みたいなヤンデレ入ってるのも怖いが。

「ちっ！　まあ良い。その娘もお前たちと行動を共にするならば装

備一式は揃えてやるぞ」
「それは助かる」
太っ腹だな。
「ねえ焔、あの偉そうな人間は何かしら？」
「この国の王子だって。私や凍の装備を買ってくれてこの館をくれたの……ようは金ずる」
最後に付け加えたのは人間の聴力では聞き取れない程度の声量で呟かれた。
頼むから聞こえるように言うなよ。
「で、この人たちは何だ？　俺は使用人なんて頼んでないぞ」
「私の親衛隊だ。お前たちのことを話したら『是非身の回りのお世話は私たちが』と言って聞かなくてな」
その割に隠しきれない敵意がビシビシぶつけられてるんだが？　もしかして親衛隊は親衛隊でもアイドルの親衛隊みたいなのか？　勘弁しろよ。
「まだ時間があるな。今からその娘の武具を見に行くのはどうだ？」
「ならその間に寝室１つ追加してくれ」
「そうするとしよう。メイド長、頼んだぞ」
これならオバチャンの宿の方が良かったかもな。
気にしても始まらないのでさっさと武具を見ることに気を集中した。

オッチャンはまた俺が妙なこと言わないか楽しみにしているようだがそうそう思いつくはずもない。精々ゲームの中で印象に残っているものと照らし合わせるくらいだ。

さて、雷はどんな武器にするやら。

「店長さん、これ、こっちをもう少し重くできないかしら？」
「おいおい、こりゃ大の男が両手で、」

何やらブオンブオンッという軽快な風切り音が聞こえてきたので雷の方を振り返る。

身の丈よりも大きなハルバートを片手で振り回す少女がそこに居た。

さっきの会話から察するにあいつ更にどっか重くしてくれって頼んでたよな？　てか俺でもあのサイズを片手で振り回すのつらいんだが？　流石、筋力に特化した雷琅族は鍛え方が違うな。炎琅族も筋力強いけどあそこまでじゃないぞ？　ちなみに氷琅は幻琅の中では１番筋力がないと言われている。
オッチャン、顎抜けるんじゃないか心配になるほど口開けてるな。
ちょっと注意しとかないとヤバイか？

「やっぱり、もう少し斧が重い方が振りやすわ。頼めるかしら？」
「お、おう！他にも要望があったら言ってくれ！　あんた用にどこまでも突き詰めてみせるぜっ！」

あ、スイッチ入った。ああなると本当に武器と睨めっこ続けるから大変だってオバチャンが言ってたっけ。

細かい重心の調整をしてから買った雷の防具、と言うか魔石の付い

た服は俺の教会の戦闘服の白黒を反転させたようなものだ。だが男用の服の小さいサイズを着ているだけなので胸の部分が入らない。つまり胸の部分だけは空けている。本来白のはずの教会の服を黒にして胸元が大きく空いているその姿は何とも背徳的だった。さっきから外野の人間たちが雷の胸にチラッチラッと視線を飛ばしている。男のチラ見は女にとってはガン見だって聞いたことがあるが本当だな。意識して観察していると視線の出どころが凄い良く分かる。俺も気をつけよう。

武器の調整は3日くらいかかるからと予備のハルバートを渡されその日は館に戻った。

9話　飼い主は家に（後書き）

今回の纏め（嘘）：師匠と2人きりの修行？　を無事切り抜けた魔法使い見習い。しかし竜と魔王の熱烈なアピールに疲れてしまい風邪をひいてしまう。人間の看病の方法が分からない竜と魔王は放り出され、治癒魔法が使えない師匠は役たたず。唯一普通の看病ができる勇者がつきっきりで看病すると決まったが先は思いやられるばかり。そんな時、魔王の配下がやって来て爆弾発現しやっがた。

「魔王様、いつ魔法使い見習いとご結婚なさるのです？」

今、人間と魔族と竜の血で血を洗う戦いが始まろうとしていた。

１０話　眠気は真相に（前書き）

前回の荒筋（嘘）：魔法使い見習いを賭けた勇者ＶＳ魔王ＶＳ竜ＶＳ師匠の戦いは苛烈を極めた。勇者の斬撃は大地を割るし、魔王の爪は森を消滅させるし竜のブレスで空は焼けるし師匠の魔法で山に大穴は開くしで世界はパニックに陥った。色々面倒な発言をした魔王の配下は磔にされて魔王たちの説得に向かわされるが一瞬で吹っ飛ばされて行方不明。この世の終わりに絶望する人間と魔族の前に１人の英雄が現れた。

「病人の近くで五月蝿いっ！！」

風邪で意識が朦朧としている魔法使い見習いが勇者たちと魔王に拳骨落として事態を収拾（全員気絶）、その後自身も無理が祟ってバタンキュー。こうして世界は救われたのだった。

ＰＳ：大晦日ということで数話一気にあげます。

１０話　眠気は真相に

見慣れない住処に帰ってきた俺たちは早速、晩飯にすることにした。武器屋のオッチャンと雷の話が長引き空腹が限界に来ていたのだ。ちなみに王子は焔にウザイと思われない程度の小さなアピールを続けている。

食事を終えて各自の部屋を確認した。

２階に俺、焔、雷の順に部屋が並んでいる。ただし、この部屋は全部テラスで繋がってる。妙な作りにしやがって、デザイナーの趣味疑うぞ。

「凍、テラスの鍵開けておいてね」

俺の部屋を見に来た焔にそう耳打ちされたときは少し危機感を覚えた。流石に焔も無理矢理はしないよな？　俺、無理矢理はするのもされるのも嫌だぞ。

雷は『私があの服を選んだのはただ気に入ったからよ。だからあの服にしたの。あの服を選んだことに他意はないのよ』と言ってきた。逆に怪しいから他意がないのなら何も言うなと言いたい。

流石に寝る少し前の時間になったら王子は帰りメイドたちも館の１階にある集団寝室に消えていった。

ようやく眠れると思い部屋のベットに潜る。

テラスが叩かれた。

誰だよ。まだベットに入って１０秒も経ってないよ。こんなに微妙な安眠妨害初めてだよ。　起こすならあと5秒速く来てくれよ。

そして相変わらずツッコミが長いぜ。

「凍、鍵開けておいてって言ったのにっ」

「焔との約束を破るなんて、私あなたを過大評価してたみたい。修正しておかなきゃ」

怒るのはむしろ安眠妨害された俺の方ではないだろうか？

そもそも何しに来んだ？

「今の内に話しておこうと思ってね。私があんな所に居た理由、あの黒い魔獣について知っている限りのことを」

それを先に言え。

「さっきも話したけど雷琅族の中でも炎琅族との抗争を望んでいるのは極一部の大人たちよ。私の代には殆ど居ないわ。だから、炎琅との抗争に意識を取られすぎていたから、大人たちはアレに気付くのが遅れたのよ」

「黒スライムのことか？」

勿体ぶった話し方に飽きた。速いですか？　知りません。

「黒スライム？　ああ。ええ、そうよ」

俺のネーミングには納得してもらえたようだ。

「アレは急に私たちの村に現れたの。そして、気付いたときには多くの大人が体を乗っ取られてたわ。今頃、雷琅の村は黒スライムの村になってるんでしょうね」

黒スライムで定着したらしい。

「黒スライムの正体は分からないのもそうだけど、どこから来たのかも不明というのが不気味だわ」
「本当に急に出てきたみたいだね」
「消え方も不気味だったな。霧散するみたいな消え方だったぞ」
「村で見たわ。その狼は倒した直後に、他の黒スライムに捕まったのだけどね」
「で、お前は村から脱出してあそこまで逃げてきたってことか？」
「そうよ。見損なった？」
「いや。俺たちも焔の親父さんだけ残してここに居るからな。同類だ」

雷は何も聞かなかったし、焔は何も言わなかった。
前者は同族特有の沈痛な面持ちで、後者は特に興味がなさそうな表情だった。

「村までの道は覚えてるのか？」
「覚えてないわ。正確には途中で崖から飛び降りたから戻り方が分からない、になるのかしらね」
「思い切ったことしたねっ」
「ええ。もう1度同じことをしろと言われても無理ね。運良く斜面や木を使って下まで降りたけど、今度は失敗すると思うわ」

どんなアクロバットだよ。

「私が話せるのはこのくらいよ。寝床まで用意してくれたのにごめんなさいね」
「雷琅の村の話を聞けただけでも収穫だったよ。そう簡単に幻琅の村の情報が手に入るとは思ってない」

むしろ何も言わずに消えてしまうと思っていたくらいだからな、ちょっと拍子抜けしているくらいだ。

「じゃ、私は部屋に戻るわ。おやすみなさい」
「ああ、おやすみ」

あれ以上は何も聞けないだろうな。知っていても話さないだろうし聞いても関係の無い話しか出てこなさそうだ。
今日のところは雷琅の村が壊滅的なダメージを受けたってだけで良しとしよう。
で、焔は自分の部屋に帰る様子がない。

「久しぶりに狼の姿で寝よっ？」

そうきたか。
俺と焔は村に居る時は大概一緒に寝ていた。子供がじゃれ合うようなものだったのだが正直ある程度の年齢になってからは色々マズい。
俺も狼の価値観に慣れて、狼でも焔が美少女に見えるようになったからだ。

美少女が自分に覆いかぶさるように寝ている。

そう考えたらもう寝れない。襲う襲わないと思考が無限ループして頭の中がグチャグチャになったものだ。
そして宿に寝泊りしていたときはまだ良かった。狼になったらかなり狭く感じる部屋だったからスキンシップも少なかった。でもこの部屋は2頭の幻琅が居ても問題無い程度の広さを誇っている。
……今夜は寝かせてもらえないかもしれん。

翌朝、小鳥のチュンチュンと鳴く声で起きた。
早々に意識を失うことで正気を保った俺はある意味勇者だと思う。
自画自賛もいいところだが。
背中に乗っている焔を起こす。幻琅にとって背中を許すというのは告白をＯＫしたも同じらしい。知らないとはいえ許可した昔の俺を１度殴りたい。この生殺しは中々辛いぞ。

廊下に誰かの気配がしたので急いで人化する。
ノックされて扉が開かれる。入って良いか聞こうぜ？

「コール様、朝食の準備が……」

メイド長だったか。まだ３０にもなってないだろうにメイド長になるなんて優秀なんだろうと評価している人だ。普通にしていれば優しそうな顔なのだが考え込むような表情が多くて損している気がする人だ。勿体ないな。
ちなみにメイド長の言葉が途中で途切れたのはうつ伏せの俺の上に焔が馬乗りに乗っているからだ。俺が仰向けならば反応のしようもあったのだろうがうつ伏せのため焔が起こそうとしているように見えなくもないのだ。

「朝飯か。焔、行こう」
「うんっ！」

そんなに嬉しそうな顔されると反応に困る。何も言わないけどな。
分かっていたがメイドたちは王子のファンで王子が結婚してくれと言った焔の醜態を掴んでやろうとの意気込みでこの館に来たらしい。
しかし昨日の晩飯のとき、肝心の焔が王子に対して無関心な姿を見

て戸惑っている。
もしかしたら王子M説が広まるかもしれないな。良い気味だ。

さて、今日は雷もギルドに登録するって言ってたから連れてってやらないとな。
……リーガルの渋いモードはいつまで続くんだろうか？

１０話　眠気は真相に（後書き）

今回の纏め（嘘）：世界を救った英雄、魔法使い見習いは人間の王にも魔族にも崇められて疲れる毎日を送っていた。

「正直、気疲れする」

それもそのはず、連日お偉いさんや一般人がお礼を言いたいと押し寄せてくるのだ。辟易した魔法使い見習いはとうとう旅に出て静かに暮らそうと考えた。しかし勇者たちと魔王が放っておくわけもなく、平穏とは言えない道中は確定だった。それでも、全員が居る心地良さに苦笑いする魔法使い見習い（女）だった。

ＰＳ：（嘘）シリーズはこれで完結です。

11話　驚愕は襲撃に

さて、予告通り俺たちは雷の登録と依頼を受けるためにギルドを訪れたわけだが、

「帰りたいわ」

「私も最初はそうだったよ。分かる分かる」

美少女2人がマゼンタな建物に拒絶反応を示しています。俺だって入りたくないぞ。

「良いから行くぞ。ただ飯食らいになるなら追い出すからな」

「くっ、卑怯よ！」

「どこがだよっ！？」

まさかヒモにでもなるつもりだったのか？　家にそんな余裕はありません！

「は～、リーガルさん、元に戻ってると良いね」

「雷のこと考えると今の方が良い気もするけどな」

「私は前の方が……どっちも困るかも」

そりゃ我侭だ。

とにかく入る。

カウンターで注文された軽食を作っているリーガルの所まで行く。

今日はどっちだ？　この前のは娘が来るからキャラ作りしていたんだと思いたいがあっちが素なら見た目通りだ。逆にオネエが本性なら詐欺で訴えても良いレベルだが。

「リーガル、新人の登録を頼む」

どっちだ？　どっちが来る？

「まっかせて～ん！　あらやだっ！　コールくんったら新しい女の子連れて、これはホムラちゃんピ・ン・チッ？」

オネエの方だったか～

少しでも期待した分、残念感が強い。焔の視線の温度がマイナス行ってるけど今は無視。

雷は、固まってるな。でも渡された書類はキッチリ書いてる。項目の少なさに驚いてるけど。

「アズマちゃんって言うのね。ホムラちゃんやコールくんと同じであんまり聞かない響ね。それにしても皆１６歳だなんて、若いって羨ましいわぁ～」

やっぱキツい。そろそろ依頼受けて出て良いだろうか？　雷は１人で雑用頑張ってくれ。

俺は２度目だから細かい説明は聞き流す。

「じゃ、アズマちゃんはコールくんたちとＣランクの依頼を受けれるけど、どうするの？」

「一緒に受けさせてもらうわ。その方が効率的ですもの」

「わかったわ。コールくん、優しくしてあげなきゃ駄目よ？」

は？　Ｄランクなのにランクの依頼受けれるの？　初耳なんだけど？

「Ｄランクの冒険者だけに限った処置よ。ＣランクがＢランクと一

緒に居てもBランクの依頼は受けれないわ」

そうかい。

とりあえず良さげな依頼を見繕う。洞窟のミノタウロス討伐、洞窟が未知数だから却下。森の昆虫魔獣の駆除、これなら良さそうだ。リーガルに依頼書を通して森に向かった。

「あそこまで動揺したのは久しぶりだわ」

リーガルに大分衝撃を受けたらしい。俺も最初はそうだったよ。

「悪い人じゃないんだけど、キャラが濃すぎるんだよねっ」

「そうね。あれでは違う意味で疲弊してしまうわ」

「だよねっ」

言いたい放題だな。

駄弁っている内に森に到着。雷と出会ったのとは別の森だ。あっちが針葉樹ならこっちは広葉樹が生えている。

さて、依頼内容はカブトムシ、ローパー、カマキリをそれぞれ3体ずつ倒してこいとのことだ。このメンツで負けはないだろうな。

だが今日は雷に人間の武器に慣れてもらわなければならない。そして今日は俺の銃は散弾ではない。威力のない散弾ではカブトムシの甲殻に対して無意味なのだ。

オッチャンが調子にのって魔石を入れる弾倉を変えるだけで散弾と単発の変更ができるようにしやがったのでこの銃は弾の種類が変えられる。リボルバーの弾倉を開くとスリットが2つあり単発、散弾を簡単に変えられるようになっている。最初は驚いたが、まあ使い分けができるのは嬉しい。単発の方は要練習だが。

「人間の武器に頼ることになるなんてね。でもこの斧槍は手に馴染

むわ」

森に入って即行で遭遇したカマキリを両断した雷が皮肉気に呟いた。
オッチャンの武器に文句はないようだ。調整が終われば更に馴染むだろう。
俺も空飛ぶカブトムシを地面に蹴り落とし、銃口を突き付け撃ち抜く。
あ、銃で叩くの忘れた。

「でも人間の武器使っちゃったら本当に手応えないよね。これだったら家で凍と遊んでるほうが楽しいよ」

カマキリの首に法剣を巻き付け、一気に引き戻すことで喉（？）をズタズタに引き裂いた焔が退屈そうに言った。
そう思ってくれるのは嬉しい限りだが、その殺し方は酷いと思うんだ。あれじゃ息できなくて少しずつ死んでいくよな？
その後襲い掛かってきた触手ウニョウニョのローパーも瞬殺して討伐部位を切り落として王都に向かった。カマキリは鎌、カブトムシは角、ローパーは中央の太い触手だ。

「あれ？　火の匂いがするよ」

王都の直前で焔が不思議そうに言った。炎琅である焔は何かが焼ける匂いに敏感だ。
王都で火事でもあったのだろうか？
だが王都が見えてくるとそれどころではないと分かる。俺たちが居る王都の反対は全体が燃えている。

「っ！　急いで戻るぞ！」
「うんっ！」

「分かったわ！」

王都に入ると魔獣が暴れているのが見えた。冒険者や騎士が戦っている。

「ヒャッハーッ！」

家の上に居た蠍が騎士に飛び掛り、押し倒し、その大きな尻尾で頭を刺し潰した。その目は赤く発光している。

「黒スライムかっ！」

「なんですって！」

「本当みたいだよっ。目が赤く光ってるもん！」

これは面倒なことになったな。アレに効くのは焔の法剣くらいしかないんだが。とにかく冒険者に混じって魔獣を倒し、黒スライムを攻撃してみるか。

俺が銃で撃ち抜く、元に戻った。

焔が法剣で切り裂いた、霧散した。

雷が斧槍で叩き切る、霧散した。

斬撃なら消えんのかよっ！？

「魔獣を倒したら出てくる黒い霧は斬撃武器で対処しろっ！　打撃は効かないぞっ！」

こんな簡単な弱点だったのかよ。どおりで雷琅得意の殴りが通じないわけだ。

そして俺は魔獣を倒すことに専念するしかない。氷の爪で切り裂きたいが人間の前でやるわけにはいかない。そうなると黒スライムに対して無力だ。

大声で指示を出したのは良いがまともに魔獣を倒せているのは俺たちだけだった。黒スライムに乗っ取られた魔獣は微妙に頭が良くなっているようで不意打ち、連携して人間を攻撃している。
もうちょい頑張ってくれよ！

「１番隊は防御陣を展開！　２番隊は前に出て３人で１匹を攻撃！
５番隊は後方の魔獣を穿て！」

聞き覚えのある声で指示が飛び、それに合わせて騎士が動き始めた。大きな盾を集団で構える者たち、３人で魔獣を囲む者たち、盾の集団の後ろで弓を一斉に構える者たちだ。

「お前たち、よくここを死守してくれた。礼を言うぞ」

王子だった。馬に乗りどこかから急いで来たらしい。馬がゼーハーゼーハー言ってる。

「マジ勘弁してくれよ！　尻が３つに避けるとこだったじゃねえかっ！」

馬、頑張ったな。でもその下品な顔を焔と雷に向けるな。２人が下ネタ言いかねない。

「私はこの区域の掃討する。お前たちは武器屋のある通りに行け！」

事情は分からんが俺たちは信用されているみたいだ。
この王都がなくなると幻琅の情報が入らなくなる。
それは困る。
このまま村に帰らないというのは有り得ない。

最近は人間の作る食事が美味しくて旅をしてみたくなっているが、
まずは両親にそのことを伝えなければ。
今まで育ててくれたのだからそれくらいは言うべきだろう。
それに焔の親父さんの安否も確認しなければいけない。
やはりこの王都はまだ必要だな。

「凍、どうするの？」
「正直、私たちにこの王都を守る義理はないわよ？」

2人には悪いが俺にはこの王都が必要だ。まあ俺が気持ち良く生きていくためだけのプライドだから2人には関係無い。

「俺にはまだこの王都は必要なんだ。2人は自由にしてくれ」

この2人のことを束縛する気はない。誰かを束縛するのは苦手だよ。

「私は凍と一緒に居るよっ」
「私、ペットの面倒は最後まで見る主義なのよ」

物好きな幻琅たちだ。
ま、有難く頼らせてもらうけどな。

11話　驚愕は襲撃に（後書き）

王都襲撃事件勃発、でした。

１２話　反撃は再会に

王子に言われた通り武器屋に向かう。
途中で襲ってきた魔獣は俺が倒し、出てきた黒スライムは焔と雷が切った。
ちなみに魔獣は死んだり気絶してるだけだったり色々だ。一々構っていられない。

「凍、凍、褒めて褒めてっ」
「後で好きなだけ撫でてやる」
「ホントッ？」

バカップルと笑わば笑え！　俺はもう諦めた。

「凍、後でワインでも飲みましょう」
「今直ぐ返してこい！」

こいつ酒屋の店先に積まれてた酒樽から拝借しやがった！
そんな風に馬鹿やりながら走っていたら武器屋に到着、店の中の様子は雷に確認してもらい焔と一緒に店の前で魔獣に備える。

「坊主に嬢ちゃん、無事だったか！」
「オッチャン、この銃で切ったりできないか？」
「黒い霧に打撃は効かないんだったな。１０分持ち堪えろ」

雷が話しおいてくれたみたいだな。気の利くメスってカッコイイ。
そして火事の起きている方から店にワラワラと魔獣が進撃してくる。

「予備の銃くれ。時間稼ぐ」

「ほらよっ！」

投げ渡された銃を慌てて空中で握る。
見た目はマガジン式だがバレルと持ち手がL字ではなくデルタになっていて刃がついている。
この店はなんでもあるな。

大挙する魔獣の群れに突撃し、銃を全方位に乱射する。飛んでる魔獣に偶々当たりすぐ近くに落ちてきた。蹴り飛ばし、後ろの魔獣ごと壁に叩き付ける。

「死になさい！」
「逃がさないよっ！」

雷が壁からずり落ちた2匹を斧槍で切り飛ばす。2体の黒スライムが切り口から飛び出し、焔の法剣が霧散させた。

「こいつら人間じゃねえぞー！」
「魔獣が人間に味方してんじゃねー！」

「別に君たちの意見なんて聞いてないよ」

表情の消えた焔が炎を纏わせた法剣を狼の口から尾まで貫通させた。
火達磨になり霧散すらしない黒スライムが出てきて、焦げた塊になった。

「寄生虫如きが私に意見するなんて、身の程を知りなさい」

高圧的な雷が斧槍の槍でカマキリの脇腹を突き刺し、焦げるほどの電気を流し込む。プスプスと煙を出す黒スライムが魔獣から出てく

る途中で動かなくなった。
えげつないなこいつら。

「凍、その殺し方は酷いと思うんだよ」
「凍、少しは寄生された魔獣のことも労わってあげなさい」

失礼な！　打撃で動けなくなった魔獣の口を氷漬けにして黒スライムの出口を塞いだだけだぞ。

「坊主っ、あたらしい銃だっ！」

だから投げるなーっ！　そして俺はアンパ〇マンかっ！
オッチャンが調整した銃は前と変わらないように見える。精々ちょっと重くなったくらいだ。

「これのどこで切れってんだ？」
「親指の所のロック落として軽く振れ！」

言われた通りに銃の安全装置みたいなのを落とし軽く振る。
カシャンと子気味の良い音をさせてバレルの下に扇状の刃が展開した。

「ロックすれば固定される。どうでい！　俺の考案した折り畳み式展開刃はっ！」

オッチャンのネーミングセンスのなさはよく分かったよ！　強度心配だけど大丈夫なんだろうな？　って扇のように1枚1枚が重なっているのかと思ったら1つの刃になってる!?　どうなってんだ？

「その刃はオリハルコンとダイヤモンドを絶妙な配分で混ぜ合わせた特別製なんでい！　オリハルコンはダイヤと混ぜると発現する特性によりロックしているときは魔石の力で周囲の同物質と一体化させっ、ロックしていないときは1枚1枚の薄いダイヤモンド板として展開させるっ！　ロックしてなけりゃダイヤモンド、ロックしてりゃオリハルコン！　これぞ伸縮機構の革新的アイディア！！」

あんたの趣味全開だなっ！　てか俺に使わせる気満々だったろこの爺っ！　こんな短時間でこんなの作れるはずない、最初から作って取り付けるだけにしてやがったな！　そしてその似非江戸ッ子口調はどうにかしろよっ！

「私も新しい機能欲しい！」
「あなたばかり新装備なんてズルいわ」

俺の所為じゃないと思うんだ。

「お前たち、こちらは制圧した。私は今から城にたかる魔獣を排除する。手が空いてるならば手伝え」

王子が良いタイミングで来てくれたよ。空気の読める王族って素敵！

「OK、手伝うぜ」
「ふっ、話の分かる男で助かる」

王子の後に続くと騎士たちのヒソヒソ話が聞こえた。

「あれだけの魔獣を3人で」「奴らの内青毛と赤毛は王子の恩人みたいだぞ」「山賊を2人で壊滅させたってあれか？」「あの魔獣相手になんて圧倒的なんだ」「人間の皮かぶった魔人だな」

普通なら聞こえない声量だが俺は幻琅だから人間より聴覚が良い。
ヒソヒソ話は別でやってほしいものだ。
この王都の城は湖の中央の島にあり、橋を渡らないと行けない。水面を見てみると水面ギリギリに岩礁が乱立しているようだ。
これじゃ小舟でも渡れないな。

「くっ、魔獣どもめ！　もうあんな所まで！」

見ると魔獣の群が橋を渡り城の正面門にたどり着いている。騎士の死体が無惨に転がされている。

「コオル、頼めるか？」
「任せろ。この王都が消えるのは困るんだ」

別にこの王都は好きではない。だが武器屋のオッチャンと宿のオバチャンには愛着に似た感情もある。だったらあの人たちの居場所を守るくらいはしてもいい。
本音は幻琅の村に戻れる可能性が下がるのは好ましくないだけだったりする。俺って素直じゃないな。

魔獣の群に飛び込み銃を乱射。相変わらず素人丸出しのテキトーな狙いだが魔獣の数が多いので当たる当たる。
怯んだ魔獣を焔と雷が追撃し、黒スライムが魔獣の中から出てくる。俺に寄生する気か飛びかかってくる黒スライムをバレルの下の刃で横薙に切ると霧散した。
ここまでちゃんと切れるなんて、オッチャンの趣味も侮れないな。
普通の狼の顎を銃を振り上げることで打ち上げ、胴体を撃ち抜く。
出てきた黒スライムはバレル下の刃で切ることで霧散させる。
このコンボ気持ち良いな。

焔は炎が使えないのが不満なようだが法剣で複数の魔獣を同時に切り付け、橋の下に蹴り落としたりしている。当然泳げない魔獣ばかりなわけで息ができずに溺れ死ぬ。黒スライムは水中では動けないらしく一緒に水底に落ちていく
もうちょっとちゃんと相手してあげて。何か哀れ。

雷は自分が寄生されたときのことを思い出したみたいで八当りのように高速回転させた斧槍を振り回し台風みたいになっている。近付く魔獣から挽肉になって宙を舞う姿は血の雨のようだった。
生きたままゴブリンの腕がミキサーに掛けられたように削られ絶叫が響くが、斧槍の回転は止まるどころか余計に速くなる。黒スライムの姿を見ることもなくゴブリンの体が血の霧に変わった。
生きたままミキサーするのは止めたげてほしいです。

「まさか人間の仲間になっているとは思わなかったぞ」

ん？　懐かしい声だったような？　てか炎琅が魔獣の群に混じってるだと！？

「お前に焔を任せたのは間違いだったようだな」

その炎琅は、焔の親父さんだった。

１２話　反撃は再会に（後書き）

焔の親父さん登場。次回は焔さん無双になる！　予定です。

13話　親子対決は圧倒的に

「焔、帰ってくるんだ。そして魔獣の国を作るんだ」

親父さんの目は赤く発光している。黒スライムが寄生しているのが分かる。

てか魔獣の国って何だ？

「誰？」

おぉっと！　まさか自分の父親に誰言うなんて思ってなかったぞ。

「凍の敵に知り合いなんて居ないよ？　あなたが誰だかなんて関係無い。凍の敵は全部殺さなきゃだよね」

あれ？　俺の幼馴染ってこんなにヤンデレだっけ？　目のハイライトが消えてないか？　てか笑顔が薄すぎて俺がビビるんだけど。もう少し穏便にできませんかね？

「凍、焔を止めなさい。周りの魔獣たちどころか騎士たちすらビビって動けなくなってるわよ」

やかましい。できるならとっくに止めてる。てか怖くて近付けません！

「このヘタレッ！」

「じゃあお前が止めろよっ！」

「不可能よ！」

「自信満々に威張るなっ！」

「焔、お前のためを思って言ってるんだぞ！　良いからこっちに来るんだ！」
「何言ってるのか分からないよ。死ねば？」
「焔っ！」
「えへへっ、見ててね、凍。凍の敵は刺して切ってバラしてあげるから。
爪も親指も人差し指も中指も薬指も小指も手首も前腕も肘も上腕も肩も足首も脛も膝も太股も股関節も腰も腹も胸も背も首も顎も口も鼻も耳も目も頭も全部全部全部全部１センチ間隔で細切れにして凍の目に触れないようにバラバラにして消してあげるからっ！」

俺の幼馴染が怖いです。あんな病んでる幼馴染怖すぎて近寄れません。
王子も騎士も青い顔して固まってる。魔獣たちも想像してしまったのか震えている。雷は自分がゴブリンにしたことを思い出して「まあまあね」なんて言っている。
あれ？　もしかして焔と雷って同類？　俺の周りってこんなのばっかり？

「ほ、焔、父親に対してなんてことを、」
「お父さん？　ああ、そうか、あなたは私のお父さんなんだね」
「そ、そうだ！　だからそんなことを、」
「じゃあやっぱり殺さなきゃっ。凍が幻琅の情報を集めるために苦労している理由の１つは私のお父さんの安否を確認するためだものねっ」

太陽のような笑顔で振り向き、そんなことを言った。
俺、村に戻ったら両親殺されるんじゃないか？　村見つけたら手紙だけ残して即旅に出たほうが良いか？　てか焔を村に近付けるの防

がないと駄目か？

「ほ、焔？」

「凍、上手くできたら褒めてくれるかな？　きっと褒めてくれるよねっ！　だって凍の敵を殺してあげたんだからっ。あ、でも欲張りだって思われたくないなぁ。それにお父さん如きの死体なんて凍に見せたくないなぁ。う～ん、じゃあ焼き尽くしちゃえば良いよねっ。でもお父さんの焼ける匂いなんて悪臭、凍が嗅いで鼻がおかしくなっちゃったらどうしよう？　そうなったら私の鼻をあげれば良いのかな？　でも凍私が血を流すの嫌がるしな～も～、凍は我侭だよ～」

あなたは若干狂ってますけどねっ！　俺に依存してる部分があったのは前から気付いてたけどここまでだとは思わなかったよっ！　こんなヤンデレな幼馴染持った俺はどうすれば良いんでしょうか？笑えば良いと思うよ。

やかましいわっ！！

……1人漫才も久々だな。

「凍！　今直ぐ焔を抱きしめてっ！　このままじゃ手遅れになるわっ！」

言われた通りに抱きしめた。

……抱きしめる必要あったか？

「凍、こんな、皆の前で、恥ずかしいよっ！」

そんな顔赤くして可愛く言わないで！　その口でさっきのとんでも台詞を言ったかと思うとギャップで死ねるから！

「流石ね、凍。まさかこんな公衆の面前で焔を堂々と抱きしめるなんて」
「お前がやれって言ったんだろうが！」
「本当にやるなんて誰も思わないわよ」
くっ、確かに俺でも思わない。自分で思っている以上に動揺しているみたいだ。
「凍っ！　貴様っ、焔から離れろっ！」
っと、確かに焔が大人しくなったら抱きしめなくても、
「お父さん、殺すっ！」
抱きしめてないと駄目でしたっ！　何なのこの娘！　俺に抱きしめられてないと親殺ししちゃう病気なの？　どんな奇病だよっ！
「あんっ！　凍ったら、そんなに強くしないで」
そんな気持ちになれるかーっ！　もう気分は背水の陣だよっ！　君の親父さん守るので精一杯だよ！　何で俺の命狙ってる奴の心配しなきゃなんないんだよっ！　耐え切れないよっ！　もうやめてっ、俺のライフはとっくに0よっ！
口調は男のに変えるべきだったと反省。
「凍、まさかこんな公衆の面前で、」
「そのネタは重複するから却下だ！」
「ちっ」
ちっ！　じゃねーっ！

この場で余裕あんのお前だけなんだから積極的に問題解決に動けよっ！　お願いだから動いてくださいっ！　俺に構わず黒スライムを！　本気でお願いしますっ！

「そんな泣きそうな顔しないの。余計に虐めたくなるでしょう？」

ならねえよっ！

「ま、住処をくれたお礼よ。どうにかしてあげるわ。炎琅が動き出したら焔を解放しなさい」

そう言って魔獣を倒し、黒スライムを霧散させていく。

残るは親父さんだけだ。

「くっ、人間に媚び売る堕落した魔獣がっ！　お前たちに魔獣としての矜持はないのかっ！」

「あら、随分な口の利き方ね。得体の知れないモノに寄生されてるだけの存在が面白いことを言ってくれるわ」

雷さんマジ嬢王様。何か俺だけ普通で悲しくなってくるな。

「焔の殺気に当てられて動けなくなる程度の力しか持たないのに矜持なんて持っているのね。弱者のプライド程無意味で無価値なものもないというのに」

いくらなんでも言い過ぎじゃね？　あ、動けないのをいいことにボコり始めた。

「どうしたの？　あなたの矜持とやらはこの程度？　随分とお粗末ね。本当に無価値な矜持なのね。無い方が良いんじゃないかしら」

中身黒スライムだと分かってはいるが、何か親父さんに同情してしまう。

「ほら、少しは抵抗したらどうなの？　防御すらできないなんて、なんて無様なのかしら。生きる気力もなくてよく矜持だなんて言葉を使えたものね。ほら、『私は生きるための防御もできない雑魚の中の雑魚です』って言ってみなさい」

ああ、とうとうただの苛めになった。炎琅が人間の国の城の前で人化した雷琅に苛められるとかどんなレア状況だよ。もうわけが分からないよ！

「もう飽きたわ。さっさと楽になってしまいなさい」

斧槍で親父さんの頭を地面に刺さるほど強く強打し、出てきた黒スライムを霧散させた。

何か、今後女性陣に勝てる気が一切しないんだけど……気にしたら負けだな。

13話　親子対決は圧倒的に（後書き）

ようやく焔と雷の本性が出せました。
凍の本性が出るのはまだ相当先ですが。

１４話　エピローグはプロローグに（前書き）

今回は説明ばっかで読みづらいかもです。
そして中身はウッスイです。

14話　エピローグはプロローグに

魔獣が王都を襲撃してから2日が経った。事件のあった日から俺たちは館でゴロゴロしている。
あの場を見ていなかった住民からしたら街中の魔獣を屠り城を襲っていた幻琅種まで倒して捕獲した俺たちは英雄だったのだ。
外に出ようものなら人間に囲まれ、苛ついた俺に反応した焔が殺そうとする始末。これでは魔獣の襲撃と変わらないので俺は早々に館に引きこもり、この王都を出ることを決意した。
幸い王都を守った礼金として衣食住だけなら向こう3年は働かなくても平気な金額をもらったので次の街でも問題はないだろう。だからいっそのこと世界不思議食材探索ツアーに出ることにしたのだ。
氷琅の村に戻って両親に旅してきますと伝えたかったがそれは無理だ。焔がまた暴走しかねない。というかどこかに定住することは無理だろう。
俺が少しでも苛ついたら焔が暴走する。俺が苛つかなくても侮辱されたらきっと暴走する。
定住しようものなら色々なしがらみができる。そうなったら多少なりともストレスが生まれる。焔が暴走する。
……逃げ場がないな。
いっそのこと2匹だけで森に住むというのも考えたが1度人間の料理の味を知ってしまったら我慢できなくなった。不味いもの上手いのも新鮮なのだ。転生して16年、氷琅として様々な魔獣の肉を食べてきたが森の魔獣は全種類コンプリートしてる。新しい刺激が欲しいと思っていたところだった。
完全に俺の我侭だな。
さて、焔と雷に話してみるか。

「焔、雷。俺、王都を出ようと思う」

「へ～。いつ出るの？」
「王子に旅の荷物届けさせたら直ぐにでも」
「村にもどるんじゃなかったのかしら？」
「焔が暴走しかねないから却下。親父さんに手紙渡しといておけば良いだろ」
今は捕らえられてるがどうせ脱走するだろう。
「む～、私暴走なんてしてないもんっ」
もんっ、じゃない。しっかり暴走してた奴の言うことに説得力があると思うな。
「じゃあ旅の支度しなくちゃいけないわね。何を持っていこうかしら」
「え、お前来るの？」
雷琅の村探すんだと思ってた。
「あら、私が一緒じゃお邪魔だったかしら？　2匹きりのを良いことに焔にあんなことやこんなことをするつもりだったのかしらこの思春期狼は。ケダモノだわケダモノが居るわっ。これだからピンクな妄想真っ盛りの思春期ボーヤは油断ならないわね。どうせメスを見るなり組み敷いて無理矢理自分のものにすることでも想像しているのでしょう。私も気を付けないといけないわね。こっちを見ないで頂戴、孕むわ」
「孕まねえよっ！」
まさかここまで罵倒されるとは思ってなかった。何か旅の準備始める前に疲れたな。

「凍っ、そ、そんなにしたいなら、言ってくれれば、いつでも良いんだよ？　痛くてもちゃんと我慢するからっ。凍がしたいなら無理矢理でも縛るのでも殴るのでも蔑むのでも焦らすのでも何でも良いよ？　でもでも、最初からそんな激しくすると凍もつらいと思うから最初は優しいのにしてほしいな、なんて思うんだけど凍はどんなのが良いのかな？　教えてくれたら私頑張ってみるよ？　どうかな？　どうかな？」

「超乗り気っ！？」

何だこの状況っ！　リーガルの変貌なんて目じゃないくらい困るんだけど！　俺にどうしろってんだ？　焔を優しく抱けば良いのか？

それは成狼してからにしてください！

「は～、とにかく旅は全員参加ってことで良いんだな？」

「うんっ」

「ええ」

「じゃ、雷の武器ができるのも待たなきゃだな」

不安しか覚えない。俺、この先平和に食材探求できるのか？　できなさそうだな。この世に神は居ないらしい。

翌日、雷の武器と旅の荷物が届いた。荷物の確認確認っと～

オッチャンは銃に使った折り畳み式の技術力を買われて城の技術部にスカウトされたが『俺の城はここじゃねえ』と言って断ったらしい。それでも技術顧問として週１で城に出向き技術を教え合い、互

いに相手の技術を試し合うことを約束していた。
ちなみにオッチャンが作った雷の斧槍は右手の位置にナックルガードとトリガーが付いていた。トリガーを引くと槍の方が大きくなり斧がサブになる槍斧に変化するらしい。何かオッチャンの技術力が時代背景に合ってないように感じるのは俺が素人だからだろうか？
オッチャンはついでとばかりに焔の法剣も改造していた。今までの法剣は普通の剣としては全く使い物にならなかったのだが柄頭を捻ると法剣、捻らなければ普通の剣として使えるようになった。
ちなみに教会の法剣全てにこの改造を施す計画が立っているのだとか。
どんな改造したら法剣を普通の剣として使えるんだよと聞いたら『折り畳み式展開刃のちょっとした応用でい』と言われた。『でい』が『だ』だったら外道主人公の名言が再現できたものを！
宿のオバチャンは焔との別れをかなり悲しんだ。何か思うところがあったのか相当感情移入しているようだ。別れ際に『ホムラを泣かせたらケツの穴に爆竹詰め込んで破裂させてやるから覚悟しときなっ！』と有り難いお言葉を頂いた。２度と来るものか。
さて、色々な意味でラスボスなリーガルだが、この度奥さんが判明した。
結論から言おう。金髪美女であった、と。
出るとこ出て引っ込むとこは引っ込んでいる。まるで神様が悪戯に世界一綺麗な人間を作ってみようと頑張った結果生まれたような顔。その大きな胸はあらゆる男を魅了し、その蠱惑的だが清楚さも兼ね備えた唇は見る者を惹きつけ、その優しげだが強い意思を感じさせる目は万人を安心させる。
リーガルに殺意が沸いた瞬間だった。何だあの極上の絹糸かと錯覚させる金髪は。あまりの美人っぷりに思わず慣れないポエムみたいなの考えてしまったぞ。リーガル許すまじっ！

あのオネエにこんな美人とかマジないわー
この世の不条理ここに極まれりだわー
でも口を開かないリーガルとはお似合いだから余計腹立つわー
リーガルが急に渋くなったのは単純に娘が居たからだった。奥さんとしては娘の前でもあの口調にして良いらしいのだがリーガル自身が少しでも強い父親の姿を見せたいらしく、ああなったらしい。
本当に、普通にしてても頑張ってても色々疲れるギルド長だった。

最後に王子。最初に1回本名を名乗ったような気がするが誰も覚えてないので最後まで王子で通す。異論は受けうつけない。聞いても答える機会がないから。
今回の、街中での魔獣の掃討と城の防衛を成し遂げたことで一気に株が上昇。部屋に引きこもって布団被ってた兄たちよりも頼りになるとの評価を受けて晴れて王位継承の筆頭になったらしい。
俺はどっちかと言うと現場で指揮してる騎士団長とかのが向いてると思ったんだが？　俺たちが王都に戻ったばかりのとき、直ぐに的確な指示を出して魔獣を掃討する姿はどう見ても王じゃなくて騎士だったしな。
ちなみに本人は王になることには無関心で『民が平和に暮らせる国ならば誰が王になろうと構わない』と世襲制に喧嘩売るような台詞を筆頭宣言した王に返したらしい。王は大爆笑したとメイド長が教えてくれた。何とも変人が多い街だ。
そう言えば焔にアタックを続けるのかと思ったのだが『アレは私の手に収まる女ではない。精々私が放棄した狂気に溺れるがいい』と言いやがった。しかもメイド長との婚姻まで発表しやがった。この国のメイドってのは高貴な身分の女が相手探しと嫁修行の両方を兼ねているようで大した反発もなく手続きが終了、式に呼ばれたがその前に王都を出るので辞退した。
この街で1番世話になった相手でもあったので俺たちの正体を明かし（脅し）、焔の親父さんに俺の両親宛の手紙を渡すように頼んだ。

どうせ炎琅を人間が捕らえ続けるなんて無理なのだ。王子もそれは理解しているようで親父さんは簡単に脱走できるようにしておくと約束してくれた。これで無駄な被害はでないだろう。

ふう、1度に色々話して疲れた。

「凍、行く宛は決まってるの？」

「いや、まったく」

「しょうがないわね。ここから西に行くと海の街、南に行くと山の街。新しい食材の開拓をしたいならこの2択だと思うわよ」

「なら海だな。皆で遊べそうだ」

この世界にも海水浴はある。定番のデートでもあるが。

「凍、私の水着が観たいなんて……うんっ、私頑張るねっ」

「まさか私たちの水着姿で自分の劣情を満たしたいだなんて、その底無しの性欲は本当に恐ろしいわね」

「濡れ衣にも程があるっ！」

本当に、この先大丈夫なんだろうか……

１４話　エピローグはプロローグに（後書き）

これで第1部は完結です。
就活もあるので第2部の投稿は少し間を置くことになると思います
＾＾；

1話　新しい街は教会特区（前書き）

間を置くとか言いながら数日で投稿。
僕は何やってるんでしょう？
とりあえず、新章開始です。

1話　新しい街は教会特区

「まだ着かないのかしら？」
「俺が知るか」
「ひーまーだーよー」

街を出てから3日、馬車に揺られてダラダラと旅をしている俺たちはかなり緩んでいた。
ちなみにこの馬車は山賊が強奪したのをさらに強奪したもので俺たち以外に乗っている人間は居ない。
馬車を引く2頭は言葉が通じるから特に御者を交代でやる必要もないので荷台で駄弁っている。偶に馬たちが魔獣が近付いてくると聞いてもジャンケンで誰が戦うかを決める始末だ。

「幻琅さん方、あれが海の都ですぜ」

お、着いたみたいだ。
オス馬サンキュー。都に着いたらメス馬と一緒の馬小屋に入れてやろう。

「人間がつけた名前は分かりやせんが、動物の間じゃ水浴びできるスポットとして人気ですぜ。旦那も楽しめるでしょうぜ」

焔と雷を見てニヤニヤするな。馬刺しにされるぞ。

「旦那、ビビらせないでくださいよ。ただでさえ俺たち動物と幻琅とじゃ格が違いすぎんですから」
「そう思うならからかわなきゃ良いじゃないさ。こんな相方でごめんなさいね？」

メス馬は最早オス馬の女房だな。
この馬たち、くっついてるわけではないのだが知らない奴が見たらどう考えてもくっついてるようにしか見えない息の合い方をしている。メス馬曰く『わたしゃ、こんな下品なのお断りだよ』だそうだ。

「凍～、都に着いたら何する～？」
「お金の心配は要らないのだし最初は遊びましょう？」

まあギルドに顔出すのは明日からでも良いよな。

「なら宿取ったら買物でもするか。よっぽどの無駄遣いしなきゃかなり余裕あるぞ」
「ホントッ？」
「最初は水着かしら？　でも人間の服も面白いのよね」

あいつら、人間か幻琅かの境界が曖昧になってるな。俺もだけど。人間か幻琅かなんて別にどっちでも良いな。生き物だってことは変わらないし。

皆で駄弁りながらカッポカッポ進んで都に到着。馬たちとは都の入口で別れた。
山賊に襲われてキャラバンは全滅していたと見張りに伝えておいた。この先あの馬たちと一緒に行くことはないだろうな。きっと他の冒険者や商人を乗せるのだろう。
都の街並みは何とも東洋風だった。赤い柱に瓦屋根が並ぶ光景は中国の街並みを連想する。
しかしこの地域暑いな。そして人が多い。海の向こうの国との貿易港でもあるらしい。

「まずは宿に荷物置こう。買物はその後な」
「あら、『俺が全部持ってやるから好きなだけ遊べよ』くらい言えないのかしら？」
「ブーブー、凍の甲斐性無しー」
無理に決まってんだろ。
「おいっ、こんな所で何してる。戦闘員は訓練の時間だろ！」
ん？　何か金髪のシスターに怒られた。焔の修道服に似た服を着ている。
あ、教会に所属してると思われてるんだな。
「服は教会の戦闘服に似てるけど教会に所属はしてないぞ。背中にマークがないから大丈夫だと買った店の店主に言われたんだが？」
「む、確かに。まったく、紛らわしい」
イライラしているようだ。カルシウム不足なのか？
焔の修道服と法剣の組み合わせは惜しいが別の服にした方が良さそうだ。
「服を変えるなら案内してやろう。なに、濡れ衣で驚かせてしまった罪滅しだ」
ちなみに焔が暴れないか心配だったが杞憂に終わった。俺が手で制したら止まるんだな。
服屋には案内してほしいが先に宿を探したい。荷物が結構邪魔なんだ。
「良い宿の横に防具屋がある。そこなら良いだろう」

立地条件完璧じゃないか！　このシスター厳ついけど良い人だな。

シスターが案内してくれた宿は安いが広いという不思議な所だった。都の中心部から離れているから土地が広いんだと教えられた。

直ぐに部屋を取り（３人部屋）隣の防具屋で服を見る。

何か面白い服はないかと探したが見つからない。精々浴衣モドキくらいだった。どうしたものか。

「凍、これなんてどう？」

呼ばれて振り向くとミニスカみたいな藍色の浴衣の焔が居た。子供用かと思ったが袖や胴体が小さいという感じでもない。

これで通常サイズかよっ！　ちょっと走ったら中見えちゃうんじゃないか？　そうでなくてもかがんだらアウトだぞ！　今直ぐ返してきなさいっ！

「凍になら見られても良いよ？」

「俺以外にも見えるっつの！」

「凍っ、そんなに私のこと心配してくれるなんて……凍～っ」

飛びつくなっ！　見える位置に誰も居なかったから良かったようなものをっ！

「凍、安心しなさい。焔は下にスパッツを履いているからどんなに頑張っても見えないわ」

「あ、そうなのか？　それは良かっ……何着てんだ？」

「見て分からないの？」

「分かるから聞いてるんだ」

雷は何を思ったのか深いスリットの赤いチャイナ服を着ていた。
何でそんなもんがあるんだよこの店はっ！　そしてこのチャイナ服細っ！　なのに胸デカッ！　これ着れる奴居るのか？　ああ、目の前に居たな。

「中々動きやすくて良いわよ。腰くらいまで剥き出しになってしまうのは恥ずかしいけれど、これもファッションよね」

普通の人はそんなに体のラインが出る服着ないぞ。まず着れないけどな。

「凍はまだ決まってないの？　だったら私が選んであげるっ！」

そんなにグイグイ胸押し付けないでくれっ！　更衣室に飛び込まなきゃいけなくなるから！　てか帯締め直せ！　かなり緩んでるっ！

「何にしようかな～」

やっと離れたか。

「あなたも大変ね」
「そう思うなら焔を止めてくれ」
「無理よ。私はあの娘ほど強くないもの」
「自信に満ちた声で何言ってやがる」
「本当のことよ。焔はあなたに全てを差し出してるわ。私はあんな風に全てを誰かに差し出すなんてできないもの」
「俺にもできないけどな」
「でもあなたは強いわ。
自分の目的は自分の意思で果たす。誰にでもできそうだけど、誰もが難しいと感じていることよ」

「普段からその優しい口調にしてくれませんかねえ？」
「気にしては駄目よ。さ、焔が選んでくれたみたいよ」

ブンブンと手を振っている焔の方に向かう。
雷から聞き慣れない褒め言葉を聞いたせいで調子が狂うが、まあその内忘れるだろう。いつまでも覚えているのは俺らしくない。
さてさて、焔が選んだのは……お揃いの浴衣モドキ（藍色）かよ。

結局焔がミニスカ浴衣、雷がチャイナ服、俺が浴衣モドキをそれぞれ買った。この都での普段着が決まったところで次は水着を買うことにした。
最初は右から雷、焔、俺の順で横に並んで歩いていたのだが焔と俺が手を繋いでいる（繋がれた）のを見て雷が『私もやってみたいわ』とか抜かして逆の手を掴みやがった。両手に花なのは確かだが野郎どもの視線が凄い。そして雷に対抗した焔が腕を組むようにしがみついてきたのもキツかった。
忘れがちだが焔も雷も人化したら美少女なんだった。焔は可愛い、雷は巨乳という注釈が付くが。

気を取り直して水着屋を探していると海の方にあると都の地図に書いてあったのでついでに海も見ようと思った。
さ～て、どんな所かな～
木のアーチを抜けた先が海だと言うので木漏れ日の中期待を胸に歩を進める。何だか海に相応しくない気合の入った声が聞こえてくるが気にしない。海っ、魚っ、魚介類っ！

「ふんっ！」
「そこだっ！」
「まだまだーっ！」

俺と雷がさっきまで着ていたような教会の戦闘服を着た集団が、砂浜で模造刀を持って戦っていた。

1話　新しい街は教会特区（後書き）

勢いで書いたのは良いけどストックが少ないので1日1話は恐らく無理！
各章毎くらい連日投稿したいです＾＾；

2話　海水浴は時間性

「何だ、これ」
「教会の戦闘訓練じゃないかしら」
「あははっ、凍残念だったね」

マジか？　マジなのか？　マジで戦闘訓練を浜辺でやってんのか？
これじゃ海水浴も海釣りもスイカ割りも素潜りもアワビ取りもできないじゃないかっ！

「ん？　お前たちか」

あ、金髪のシスターが居た。訓練しないで何してんだ？

「私は飯を届けに来んだ。そろそろ腹が減る時間だからな。それとこの服を着ているのは非戦闘員だ」

見た目と違って繊細な気遣いのできる人のようだ。口が裂けても言えないけど。
てか修道服は非戦闘員なのか。焔普通に戦ってたな。

「浜辺は教会の貸切なのか？」
「ああ。海を楽しみにしていたなら悪いことをしたな。明日は1日使えるはずだ」
「そりゃ良かった」

明日まで駄目だったら教会に殴り込みをかけているところだ。

「海は楽しむものだからな。それにいつまでも占領していては反発

に合う」

理解しているじゃないか。危うく俺は焔を暴走させようかとも考えたくらいだが。

「凍、泳げないなら買物しよ？　泳げないなら海に来てもつまんないよ」

「海を背景にむさい男の訓練なんて拷問よ。速くここから離れましょう」

言いたい放題だなお前ら。シスターなんて頬が引きつってるぞ。

「じゃ、俺たちは戻るよ。訓練頑張ってな」

「言われるまでもない」

そう言って訓練している人間たちを見て微妙に頬を染めるシスターが印象的だった。誰か好きな奴でも居るのだろうか？　ああ、あの一際気合の入った戦闘員か。

「凍、あそこ行こっ、あそこ！」

「分かったから引っ張んなって。そんな急がなくても店は逃げないだろ？」

「時間は逃げるんだよっ」

「さいですか」

もう何も言うまい。

「あなたたち、若い男女と言うよりは親子みたいね」

グハッ！　まさかのダメージだった。まさか１６で父親扱いされるとは。

「凍は枯れてるからね。もっと若いリビドー全開にしちゃって良いのに」

「そうね。そうすれば既成事実が作れるものね」

「うんっ！」

良い笑顔ですね。内容は心が折れるものだが。

何？　欲望に負けていいの？　負けちゃうよ？　無理だけど。

「もう日も暮れるわね。宿に戻りましょうか？」

他愛もない駄弁りを続けるのは面白いと感じる今日このごろだった。

翌朝、昨日買った水着を浜辺の更衣室で着て、いざ海へ！

「凍、お待たせっ」

焔と雷の着替えも終わったみた、い……

「あら、何を惚けた顔をしているのかしらこの駄狼は。そんなに私たちの水着が衝撃的だったの？　鼻の下を伸ばしてだらしないわね。もしかしてこの後どんな風にいやらしい展開に持っていくか悩んでいるのかしら。度し難い変態ね。オスならここは『似合ってるよ』くらい気の利いたことを言えないのかしら。だから貴方はヘタレなのよ」

「凍、そんなにジッと見られたら恥ずかしいよ。でも凍が観たいって言うなら、良いよ。好きなポーズも言ってくれたら頑張ってみる。でも水着脱いでって言うのは2人きりのときにしてほしいな。凍以外に見られても何にも嬉しくないし凍以外に見られるのはスッゴク嫌だから。ねえ、凍、どんなこと、してほしい？」

ごめん焔、鼻血出そうだから上目遣いで擦り寄ってこないで。色々と限界。雷の言葉じゃないけど似合ってる。だから離れて！　マジで頼むからさあっ！

雷はキワドい黄色のビキニ、焔は白いスク水だった。
両方ともなんてチョイスしてんだよっ！　驚かせたいから見てからのお楽しみとか言ってる時点で不安覚えろよ俺っ！　焔なんて胸の所にご丁寧に平仮名で『ほむら』って書いてあるよ！　何か周りの視線が痛く感じるよ！　本当は焔と雷でハーレムなのを妬んでるって分かってても深読みしちまうよっ！　そして雷のビキニはギリギリ過ぎるだろっ！　教会の戦闘服は胸元開けてたし深いスリットのチャイナ服だしお前もしかして痴女か？　だったら付き合い方考えるわ～
……ツッコミ疲れした。

「あ、ああ、似合ってるよ。あと焔、別に今はしてほしいことないからその話は違う時にな？」
「えっ……わかった～」

一瞬ヤンデレ入りそうだったな。焔は『私のこと邪魔なの？　そうならそうだって言って。凍が私のこと邪魔だって言うならちゃんと塵1つ残さず消えるから』とか言いかねないからな、下手に断ると死ぬし断らなかったら社会的に俺が死ぬし……もうちょっとバランス取るべきだな。

「じゃ、遊ぼうぜ」
「うんっ」
「そうね」

日が傾くまで遊んださ。

更に翌日、金はあるとは言え無職でダラダラってのも性に合わずギルドに顔を出してみた。
街のときみたいなマゼンタな建物ではなく、東方風の赤いレンガの建物だった。入口の横にはチョウチンなんかもかかってた。正面の看板には『ギルド』と大きく書かれていた。自己主張の激しいギルドだ。

「こんちわー。他のギルドから来んだけどここで依頼って受けれる？」

カウンターで書類と睨めっこしてた眼鏡イケメンの兄ちゃんに聞いてみた。ちなみに雷もCランクになっている。街の防衛の功績だそうだ。王子、職権乱用しすぎだろ。

「ああっ、丁度良いところにっ！　今直ぐ受けて欲しいCランクの依頼があるんだ。頼めるかな？」
「内容による」

もし変な依頼だったら断るからな。そして都のグルメ調べとかの依頼だとなお良し！

「依頼は漁師組合からだよ。魚が住処にしてる岩礁に魔獣が住み着いたらしくてね、それを退治してほしいんだって。漁業はこの街の大事な稼ぎだからそれが滞るのはマズイんだ」

訓練してるんだし教会には頼まないのか？とも思ったが言わない。余所者が裏事情に首突っ込んでもロクなことにならないしな。

「2人とも、この依頼で良いか？」

「大丈夫だよっ」

「問題ないわ」

「良かった。じゃあギルドリングをかざしてくれ」

多分ギルドに入ってから渡された指輪だろうとあたりを付けて水晶みたいな魔石にかざす。

「これで君たちはこの支部に登録されたよ。じゃ、よろしくね」

とりあえず依頼人に詳しい話を聞くために漁師組合の事務所に行ってみた。『釣り命』の看板はちょっと引いた。

「こんちわー。ギルドから討伐依頼受けて来ましたー」

扉を開けながら入ると厳つい海の男たちがこっちを一斉に見た。一瞬後ずさりそうになったが何とか無反応を装った。

「オメエたちがあの魔獣を相手にするってのか？」

一際大きいオッサンが近付いてきて俺を見下ろした。

値踏みするような目だな。

「ここは託児所じゃねえぞ。冷かしなら帰んなっ」

低くて腹の底に響く威圧感のある声だったが焔ヤンデレモードと比べるとかなり見劣りする。思わず溜息が出そうになる。

「良いから依頼内容を。こっちは仕事で来てるんだ、成功しなかったら報酬払わなくて済むんだから気にしなくて良いだろう」

焔がキレる前にどうにか言いくるめないとな。

「ふん、ガキが生言いや、」

「速く答えてよ。凍が聞いてあなたが答える。他の話なんて要らないよ」

気が付いたら焔の法剣がオッサンの首に巻き付いていた。焔が少しでも引いたら首ズタズタになる。

やっぱこうなったか……

「あ、あの地図に印の場所だ」

完全に焔に呑まれてるな。首ズタズタにされかけてれば当然か。

地図のコピーを借りて現場に向かった。

これが問題にならなきゃ良いけどな……？

3話　噂のあいつは危険人物（前書き）

各話タイトルはテキトーですが章毎に規則があります
でも意味はない

3話　噂のあいつは危険人物

漁師組合の事務所から借りてきた地図によれば魔獣の出る岩礁はかなり深い位置だった。この辺に居る魚が食事時に出てくるのを漁船で捕っているのだろうか？　漁に詳しくないから何とも言えないな。別に細かいことなんて知らなくても良いな。

「ここなら人間に見られる心配をしなくても良いか」

地図で示された地点は洞窟だった。

「そうだねっ」

「久しぶりに幻琅の本領発揮かしら」

漁師たちの話では問題の魔獣は巨大らしい。人間サイズは平気で超えてくると言っていた。どんな味がするのか楽しみだ。

「キャー、暗いよ～」

わざとらしく引っ付くな。

「あら、骨があるわ」

狼形態で噛み付きたいです。

「駄目ね。かなりボロボロだわ」

簡単に噛み砕けてしまう骨など何の意味があるのだ！

「あ、魔獣だよ」
「でも逃げ出したわね」

そりゃ普通の魔獣が幻琅に挑むわけないだろう。王都付近の魔獣たちは黒スライムの影響でピリピリしてたから襲ってきたのだ。

「ついて行ってみましょう。何か見つかるかもしれないわ」

ついて行くも何もこの洞窟は1本道だった。特に迷うこともなく何匹もの魔獣を追い詰めてしまい仕方なく近くに居たイカの魔獣に質問することにした。

「この洞窟に人間よりも大きいサイズの魔獣が居るって聞いたんだが知らないか？」
「そっ、それなら奥ですっ！　ヒッ、食べないでっ！」

実は最初に恐慌状態で全く話が通じなくて焔が脅したのだ。かなり素直に答えてくれるようになったが罪悪感が募る。
さっさと進んでしまおう。

「俺たちが用があるのはそのデカイのだけだから他は避難しとくようにに言っておけ。別に追い立てて食おうなんて考えてない」

目に涙貯めてお礼言われた。よっぽど焔が怖かったんだな。気持ちは分かるぞ。

「凍、宿に戻ったらちょっと付き合って」

スネた表情で言われてしまった。考えてることがバレたな。ナンテコッタイ。

で、洞窟の一番奥に着いたんだが、

「ヨソモンが何の用じゃい！」

デカイって、１０メートルのタコかよっ！　デカ過ぎるだろっ！
もうちょっと手加減しろよ！　これどう考えてもＣランクの依頼じゃないよな！？

「黙ってないで何か言わんかい！」

足を伸ばして足を掴まれた。
俺はそのまま宙吊りに、焔は手を上に揃えて縛られて拘束されてる感じに、雷は両足を広げられている。そのままウニョウニョと残りの足が２人の体を舐める。
このエロダコめっ！

「凍以外が私に触るなっ！」
「あなた、死んだわ！」

焔は強烈な炎を纏った炎琅に、雷は激しい電撃を纏った雷琅に戻っていた。
あまりの刺激にタコは拘束を解いてしまった。
あ、死んだな。
焔の炎を纏った爪が切り裂き、雷の電撃を纏った腕が叩き潰す。
俺を吊るしてた足以外は原型も残さず切られ、潰され、巨大タコは死んだ。
とりあえず食材に使えそうな足は持っていこう。宿のオバチャンに調理してもらえるか聞いてみないとな。

「お疲れさん。しかし派手に殺したな」
「だって私に触ったんだよ？　凍以外が私に触るなんて絶対嫌だもん」
「あんな見た目で私に触ろうなんて不愉快だわ。生きていたことすら認めないわよ」
過去形すら認めてもらえないのか。厳しいっすね！

「じゃ、報告に行くか」

しかし、このままテキトーに依頼受けてたらその内Ｂランクになっちまうな。まあＡランクにならなきゃ良いだろう。目立つと人間じゃないってバレるかもしれないしな。この髪の時点で大分怪しいんだから大人しくしてないと。

漁師組合の事務所に到着。

「依頼の魔獣倒しましたよー」
「お、お前らか。確認部位を見せ、見せてください」

焔、睨まないの。えーって顔も無し。

「はい、目な」
「おう、確かに。あ、ありがと、よ」

どもり過ぎてて焦れったい！　さっさとギルドに戻ろう。

「依頼終わりましたよー」
「えっ、もう終わったの！？」

驚くくらいならあんな依頼紹介すんなよ。洞窟の魔獣に怯えられて地味に傷ついたぞ。

「はい、これが報酬ね。いや～、こんなにあっさり解決するなんて思わなかったよ」

何でも漁師組合は厳つい見た目で高圧的だから事務所で時間をくうと予想していたらしい。

最初からそう言っとけば焔が暴走することも無かったのにな。おかげで漁師たち焔にビビりまくりだぞ。

何はともあれ建前の労働は終わった。宿のオバチャンにタコのこと聞いたら都の定番料理とか見てくるか。

「私も行くっ」

「私も行こうかしら」

「んじゃ皆で行くか。じゃ、また偶に顔出すよ」

「うん、首を長くして待ってるよ」

あまり来たくはないんだよな。どうせ長居はしないんだし。

そう考えながら都の街並みを見ていると俺たちが見られていることに気付いた。と言うか焔が見られている。

「あっ、ようやく見つけたぞ！　こんな所で何してるっ」

息を切らせたシスターが問い詰めてきた。何だと言うんだ？

「お前たちが漁師組合の事務所で抜剣したのが問題になってるんだ。このままじゃ教会がお前たちの拘束に乗り出すぞ！」

何故教会が？　え、教会って警察みたいなもんなのか？

「この都では騎士じゃなく教会が罪人を裁くんだ。だが教会ってのは信仰心で成り立ってるからな、正式な逮捕状も罪状も無視してしまうときがあるんだ」

それが今ってわけか。宗教は政治に関わるべきじゃないな。

「よし。都を出よう」

下手したら焔が大量虐殺を始めかねん。

「そうね。ゴタゴタに巻き込まれるのは御免だわ」

「何で皆血の気が多いんだろうね」

お前もだお前も。だが焔が漁師から情報を聞き出さなかったらもっと時間がかかったはずなので結果オーライとする。

「シスター、教えてくれてありがとう」

さっさと宿に戻ったら、宿の前に教会の戦闘服を着た人間が周囲を警戒していた。

なんてあからさまな。あれじゃ気付かれて戻ってくるものも戻ってこないぞ。

「賊の特徴は？」

「青白い髪の男が浴衣、紅い髪の女がミニスカ浴衣。黄色い髪の女がチャイナ服だ」

「そうか。オノボリさんだな」

知ってるよ！　つか俺の意思じゃねえ！　俺は被害者だ！

「王都から来た商人の話では青い男と紅い女は人間とは思えない技を使うらしいぞ」
「何？」
「恐らく邪教の技だろう。この都で悪魔の技など使わせるものか」
「そうだな。我ら教会が収める都で悪魔崇拝者をのさばらせるわけにはいかん！」

熱血ですね。悪魔じゃなくて魔獣だけどな。
そもそも銃で氷を飛ばせるかと思ったが無理だった。魔石から放たれる魔力が銃弾の正体だが氷自体を飛ばす方法が無かった。ただし展開刃を氷で伸ばして間合いを広くすることは可能だった。
つまり相変わらず至近距離でしか氷は使えないのだ。悲しいのう。
さて、これからどうしたものかな。

3話　噂のあいつは危険人物（後書き）

雷「あなたに足りないもの、それはっ！
情熱、思想、理念、頭脳、気品、優雅さ、勤勉さ、
そしてなによりもーっ！
性欲が足りない！」

凍「お前は慎み深さが足らねえよっ！」

焔「凍に足りないものなら私があげるよっ！」

雷「でも焔のエロさは凍には渡せない」

凍「貰ってたまるかっ！」

作「スクライド好きなんです」

4話　修道女は恋する乙女

「神父さんっ、あっち、あっちに居るよ！」
「ありがとうございます！　やっと見つけたぞ。観念しろっ、邪教徒めっ！」

まさか一般人に密告されてしまうとは思わなかった。服変えてこっそり部屋に戻ろうとした俺の計画がパーだ。てか神父ってかなり上の位じゃなかったか？
俺たち幻琅に宗教はない。信仰するものがないのだから当然と言えば当然だが。前世から無宗教だったがな。

「とにかく逃げるぞっ」

焔も雷も不満そうだが大人しく従ってくれた。
でもいつか爆発するよな。どうにかして教会を止めないと血の雨が降るな。下手をすれば都が滅びかねない。女性陣に武器持たせてるのが間違いな気がしてならない。

「待て邪教徒っ！　いたいけな少女を2人も悪の道に引きずり込むなど言語道断！」

俺が黒幕扱いされているだとっ！

「貴様が彼女たちに命じて漁師に剣を向けさせたことは調べがついているのだ！　大人しく裁きを受けよ！」

あ、俺たち追っかけてるのシスターがウットリと見つめてた戦闘員だ。

これは……どうしたものか。

「凍、あの人間殺して良い？　良いよね？　凍を裁くなんて言ってるんだもん。凍の敵だよね？　そうだよね？　じゃあ殺そう！」

「ストーップ！　殺しちゃ駄目！　余計ややこしくなるから！」

また公衆の面前で焔を抱き止めなきゃいけないのかよ！

「貴様っ、少女を人質にとるなど！　なんと卑怯なっ！」

「良い感じに勘違いしてくれてるわよ。あなたって本当に大変ね」

「楽しそうに言わないでくれ。ゲンナリする」

もうわざとやってんじゃないかと思うほど馬鹿な勘違いしてくれやがる。焔の手見ろよ、法剣に手かけてんぜ？

「凍が私を人質に？　何言ってるの？　凍は私のことを傷つけようとなんてしないよ？　私が傷つく前に何とかしようとしてくれるもん。凍のことを知りもしない害虫が凍を語るな！」

焔さん自由っすね。その気楽さの1割でも分けてくれたら俺はかなり楽になるんだ。

「な、何を言ってるんだ君は」

「凍を裁く？　誰が？　面白くない冗談だね？　なら私も裁いてあげるよ。塵1つ残さなければ良いかな？」

あ〜、教会の人からしたら意味分かんないだろうな。自分が救おうとしてる少女が自分に敵意向けてんだもん。

「焔、別に俺は怒ってないからここは逃げるぞ」

「うんっ」
「結局こうなるのね」
嬉しそうな笑顔と憂いのある表情、対照的だな。
「えっ、待て！」
待てと言われて待つわけもなく路地に入り家の上に飛び上がる。これで戦闘員は俺たちを見失うだろう。
「くっ、逃げられたか」
まあ2階建ての家に飛び上がったなんて思わないよな。
「しかしあの紅い少女は……いや、よそう。僕には不可能なことだ」
うわ～、切なそうな顔しちゃってるよ。またか？　また焔なのか？　モテるな。嬉しくはないだろうが。
「ふう、これからどうしましょうか？　宿には戻れないわよ」
「あの様子じゃ俺たちの部屋に踏み込んでそうだったしな。厄介な話だ」
「全部追い出すよ？」
「生きてることからだろ？　それはマズイ」
「はーい」
不満そうに頬膨らませないの。潰してみたくなるだろう。
「とりあえず俺たちを逮捕命令を覆そう。このままじゃ旅の道具も回収できない」

「そうね。まずは教会に忍び込もうかしら？」
「だな」
「でも教会ってどこ？」
「「……」」

焔さん、普段は天然でヤンデレなのに良いところ突いてくるね。５０ポイントあげるよ。１００ポイント貯まったら１つだけお願いを聞いてあげよう。

「シスター探して聞くしかないな。都のことは都の住民に聞くのが１番だ」
「はーい。臭いはあっちからするよ」

仕事が速い娘って良いよね。５０ポイントあげるよ。何が良いか言ってご覧？

「子供っ」
「２年後」
「ブーブー」

だから大人になるまで待てと言ってるだろうに。最近焔へのツッコミが小さく済んでて助かってます。

「コントやってないで速く行きましょう。退屈だわ」

そう言う理由かよ。まあ雷っていつもこんな感じだけど。
とにかくシスターに位置を屋根から確認。丁度人の少ないパルテノン神殿みたいな建物に入っていくな。何々、
『海の都教会支部』
ここかよっ！　わざわざ聞くまでもなかったよ！　てか豪華だな！

そして焔へのツッコミが減ったと思った矢先にこれだよ！

「案外あっさり見つかったわね。速く終わらせましょう」
「そうだねっ。凍を裁くなんて言い出した人間を血祭りにあげなきゃっ」

何だろう、都のためにも俺たちが出ていくのが最善な気がしてきた。とにかく教会支部に忍び込む。狼の鼻の御陰で人間が近付いてくるのはかなり速い段階で気が付くので天井に張り付いてやり過ごす。あ、司祭室発見。覗いてみる。

「あの冒険者たちは悪人ではない！　漁師たちが彼らに言いがかりをつけたのがそもそもの原因だ！」
「だが抜剣したのは事実なのですよ。言い逃れはできないでしょう？　ねえ、キスタニア王国第1王女、ヘンリエッタ・キスタニア殿」
「私は、ただの修道女だ」
「ふふふっ、そうでしたな。では、自分が何をするべきかもわかるでしょう？」

シスターが赤いレンズの眼鏡のガリジジイと口論しているが言い負けている。
王族だったのか。王子とだいたい同じ年に見えるからどっちが上か分かんないな。

「それに賊を捕らえられなければ戦闘員の意味もないでしょう。このままでは戦闘員の縮小も有り得ますな？」
「くっ！　私に彼らを捕まえろと？」
「あなたは賊と多少なりとも交友があるのでしょう？　なに、ただ我らが居る所に連れてきてくれればいいのですよ」

でなければあの熱血戦闘員がどうなるか分からない、と。おいおい、司祭のやることじゃないだろう。

「我らは神を信仰しているのではなく、人々が幸せに暮らせるように協力しているだけなのですよ。ならば人に牙向く邪教の者を見過ごすことなどできますまい？」

典型的な自分以外を認めない狂信者？　いや、私腹を肥やす小物か？

「凍、あのジジイ殺そう？」

「私もあの手の手合いは嫌いだわ。焔に賛成」

どうしよう、俺もそっちの方が良い気がしてきた。

「そうだな、俺たち捕まえろって命令を取り下げさせてから殺すか」

アレに触ること考えたらウンザリしてきたけど。

4話　修道女は恋する乙女（後書き）

悪代官キャラ登場。
すぐ消えるかな？　多分消えるだろうな。

5話　再開の黒スライムは面倒

「では、彼らに会ったらよろしく頼みましたよ」

ニヤニヤしている司祭を振り切ってシスターが扉に向かって歩きだした。慌てて天井に張り付く。

危なかった。司祭室がそれなりにデカくて助かったな。出てくるまでにちょっと間が開くし。

「ふっふっふっ、王都では短慮な同胞が失敗しましたが私は違う。彼らが人間社会に出てきた理由は分かりませんが、私の邪魔はさせません！」

シスターが出ていった扉から人間には聞き取れない声量でそんな台詞が聞こえた。

もしかして、これって、

「雷琅族を制圧できる我らがたかが幻琅の子供3匹に遅れを取るなど、本来あってはならないのですから！」

何か1匹（？）で盛り上がっちゃってるよ。気持ち悪いな。

「まさかこんなにあっさり正体が分かるなんて、ご都合主義かしら？」

「あ、黒スライム？」

「みたいだな。やってらんねー」

あの赤いレンズの眼鏡は発光を隠すためか？　シスターに聞いてみるか。

「命令を取り消させるためにもシスターに会おう。もしかしたら黒スライムの企も台無しにできるかもしれない」
「あら、あなたも結構酷いこと考えるのね」
「凍を捕まえようとするなら敵だよね？　殺していいよね？」
「今は駄目」
「えー」

とりあえずシスターを追っかけて教会支部を出て人気がなくなった辺で話しかけた。

「こんちわ、シスター」
「な、お前たちっ」
「静かにして頂戴。面倒になってくるわ」

雷、その殺気は抑えような。

「司祭室での話は聞かせてもらった。で、相談がある」
「だが、お前たちはっ」
「凍の相談を無視するの？　そうなんだ？　そうなんだね？　だったら凍の敵で良いよね？　じゃあ殺そう。凍、良いよね？」

駄目に決まってんだろ。シスター怯えちゃっただろうが。

「シスター、司祭があの眼鏡を使い始めたのはいつからか分かるか？」
「い、５日前からだ」

王都での黒スライム騒動の生き残りで間違いなさそうだな。

「ところで王女」
「私は修道女だ」
「隠しても知ってるって。俺たちは王子の知り合いだし」
そう言って王子にもらった指輪を見せてみた。
「本当にあの愚兄の恩人だったのか」
ちゃんと通じたか。通じなかったら面倒だったな。てかあっちが上なんだな。
「もしこの都が魔獣の大群に襲われるかもしれないって言ったら、どうする？」
「何の話だ？」
「実はこの前王都が魔獣の大群に襲われたんだ。寄生されて、目が赤く光った魔獣に」
「……司祭の目も同様だと？」
「話が速くて助かるよ。俺はそう睨んでる」
「証明できるのか？」
「司祭を倒せば黒い水の塊みたいな魔獣が出てくるはずだ。そうでなくても眼鏡を取ったら分かるかもしれないしな」
「……どうすれば良い」
食いついたな。
「俺たちを捉えるための包囲網に司祭を呼び出してくれ。一般人が居る所だとなお良い」
「……善処しよう」
交渉成立。あとは当たるも八卦当たらぬも八卦、だな。

「上手くいくかしら？」
「駄目だったら力尽で引きずり出すしかないな」
「大丈夫だよっ。私が全部やってあげるからっ」

焔、表情は柔らかいのに目からハイライトが……考えるのはよそう。
シスターは大通りの人が一時的に少なくなるタイムポケットを狙って俺たちと会う約束を取り付けたと報告することにした。その時間は住民は建物に入っているだけで人が居ないわけじゃないらしい。
騒ぎが起きれば皆反応して顔を出すだろうと言ってた。
信用できるかは別として悪くないプランだろう。

「時間ね」
「あ、シスター居たよ」
「鬼が出るか蛇が出るか」

路地に飛び降り、シスターの居る大通りに出てみる。

「こんちわ、シスター」
「あ、ああ。司祭は来ると言っていたぞ」
「そうかい」
「本当に来るのかしら？」
「来なくても関係ないんじゃないかな？」
「最終的にはそうだろうな」

「離れろ、ヘンリエッタ！」

ん？　この声はあの熱血戦闘員か？　ぞろぞろとお仲間引き連れて

きたな。

「ここまでだ、邪教徒。観念してお縄に付け！」

完璧に俺だけに言ってるよ。焔と雷は俺に騙された可哀想な少女って思われてんだろうな。

「君が悪魔の力を使う邪教徒ですか。このようないたいけな少女たちを惑わすとは、」

「見つけた！」

司祭の登場に焔が一瞬で距離を詰めて捕まえ俺たちの所に戻ってきた。

手際良すぎるだろう。

「なっ、何をするのです！」

五月蝿いので眼鏡を取ってみる。想像通り赤く発光していた。

「やっぱ寄生されてたか」

「こんなにノコノコと出てくるとは思わなかったわ」

俺たちを取り囲んでる戦闘員たちが司祭を見て動揺している間に雷が斧槍の石突きで司祭の腹を殴り気絶させた。

「なっ、貴様！」

雷を見る目が被害者を見る目から加害者を見る目に変わったが、直後に司祭の口から黒スライムが出てきたことで絶句した。

「消えなさい」

斧を振り下ろし黒スライムを霧散させた雷は退屈そうに片手で斧槍を振り、背中にしまった。焔は興味無さそうに司祭を落とした。俺の出番なんだろうな。

「俺たちは各地で起きてる今の黒い魔獣の退治をしている。この魔獣はつい先日王都を襲った魔獣の群の原因でもある。信じられないならば王都に居る第3王子に確認を取れ。俺たちは王子と共闘し、城の防衛を果たしている」

一部口からデマを交えて戦闘員たちを黙らせる。

さて、上手くいくか？　いかないよな、穴だらけだし。

「……王子がお前たちを覚えているという保証は？」

「王子の危機を救った証として指輪を頂戴した。それが証拠だ」

指輪を見せてみると意外と通じた。本当に証になるんだな。

「……では、漁師組合の事務所での一件は？」

「漁師たちが絡んできたために連れが暴走した。それについては素直に謝罪する」

「悪魔の力を使ったとも言われていますが？」

「王都の武器屋に頼まれ、武器を試験運用していたのを勘違いされただけだと思われる。技術顧問になった者だから調べれば直ぐに確認できるはずだ」

「……」

「こちらは濡れ衣で丸1日追い回されたのだ、そろそろ解放してもらえないか？」

でないと焔が限界なんだよ。空気読んで！　お願いだからっ！

「だが、確認が取れるまでは、」

「いい加減にしてくれるかな？」

はい焔さんスイッチ入っちゃいましたね。法剣を普通の剣にした状態で切っ先向けちゃってるよ。

「無実の凍を犯罪者扱いして追い回した挙句、そっちの都合で拘束でもするつもりなの？　だったら私にも考えがあるよ？　私は凍の敵は殺す。あなたたちは凍の敵だから殺す。今、この場で、全員残らず」

「えっ、ちょっ、僕たちはっ」

「あなたたちの意見なんて聞いてない。凍の敵の話を聞く必要もない。速く死んで」

「はい、ストップ」

人間より焔に神経使ってたら世話ないな。

5話　再開の黒スライムは面倒（後書き）

今回の焔さんは優しめでした。

6話　面倒な交渉は安息

「焔、落ち着け」
「はーい」

不満そうにしないの。

「確認が取れるまで俺を監視していれば良い。そこのシスターなんて適任じゃないか？」
「私？」
「なっ、ヘンリエッタをか！？」
「偏見溢れた戦闘員よりはマシだろう？　王都に確認の使いを出して黒い魔獣の話と王子の話の確認さえ取れば良いんだ。精々7日といったところだろ」

いい加減飽きてきた。やっぱり働かないで宿でダラダラしてれば良かった。金もあるしな。

「……だが、僕にはそんな権限は無い」
「誰ならある？　悪いが司祭は却下だ。魔獣に寄生されていた間にどうにかなっている可能性がある」
「司祭様以外に、その判断を下せる者は居ない」

ダルいな。シスターに頼もう。

「シスター、暴露して良いか？」
「仕方ないだろうな。私にも責任がある」

戦闘員と騒ぎに気付いた住民がシスターに注目する中、シスターは

服の下に隠していた小さな宝石で装飾された指輪を取り出し宣言した。

「この場はキスタニア王国第1王女、ヘンリエッタ・キスタニアが預かる！　教会の者たちは冒険者たちの言に従え！」

あ、全員ポカーンとしてる。

あれから都は大騒ぎだった。シスターの持っていた指輪は王族しか持っていない特別な物、つまり絶対的な強制力のある物だったらしい。

ついでに言うならシスターの淡い恋心は砕けたっぽい。熱血戦闘員の態度は王族に対する敬ったものになり、前みたいに気軽に話せなくなったのが残念だと言っていた。

王族は大変だなと思う。王子の恋もシスターの恋も俺がぶち壊しにしているのだが。

犯人は、俺だっ！

何を言ってるんだ俺は。

「さて、コオル。私に何か言うことはないか？」

俺たちが取っている宿でシスターがそんなことを聞いてくる。

「王子と揃って王族に知り合うとロクなことがない。俺に関わるな」

「私の恋をぶち壊しにしたのに悪意が無いだとっ！」

「あなたは凍の平穏をぶち壊しにしたんだよ？　死ぬの？　死ぬよね？　凍の平穏をぶち壊しにしたのに自分が被害者みたいな顔してるんだもん。表情作れなくなるように顔の皮削いだら少しはその傲

慢な考えもなくなるかな？　かな？」
「すみませんでした私が全面的に悪かったですっ！！」

早口っ！　殆ど聞き取れなかったけど土下座したから言いたいことは分かった。でも焔はやり過ぎ。流石に法剣を首に巻きつけるのは止めろ。

「あら、焔。削ぐなら全身にしてあげないと不公平よ。顔だけ削がれたらお肌の手入れが面倒だわ」
「あっ、そうだったねっ」

削いだら手入れも何も無いから！　そもそも削ぐな！　同調すんな！　そしてシスターをこれ以上苛め過ぎんな！　弱い者苛めしてる気分になるからっ！

「コ、コオルッ！　私は今ほど人に感謝したことはないぞ！」

俺は氷琅だけどな。シスターにはこの先も教える気はないが。

「だけどお姫様の恋路を応援するのも面白そうね」
「私の恋が面白いと言われたんだが？」
「分かるよ。誰かを好きになるって嬉しいよね。相手に全てを捧げる感じが堪らないの！」
「私の恋はもう少し大人しいのだが？」
「恋か。良い思い出、無いな」
「コオルッ、戻って来いっ！　目が、いや顔が死んでるぞ！」

過去に村の氷琅とかに告白する前に焔と付き合っていると思われて告白すらできなかった苦い思い出が蘇る。何てショッパイ記憶なんだ。

「でも私たちの所為で1つの恋が終わったなんて嫌だわ」
「そうだねっ。何とかできれば良いんだけど」
「シスターの恋を応援でもするのか？」
「そうね。7日間は暇なのだしそうしましょうか？」
「良いねっ。やろうやろうっ」
「私の恋が暇潰しに使われる！？」

そりゃ驚愕だわな。俺もビビッたよ。

「差し当って何からするべきかしら？　私は恋をしたことがないから何をしたら良いのか全く分からないわ」
「簡単だよっ！　相手に自分の気持ちをぶつければ良いのっ」

俺には君の気持ちが重いんだが？

「そ、そうなのか？」

満更でも無いだとっ！？

「経験者が語っているんだもの。これでいきましょう！」
「そ、そうだなっ！」
「善は急げって言うし早速実践しに行こうっ！」

……失敗の空気しかないんだが？　って行っちゃったよ。

「私は、私は駄目な奴だ」

2時間くらいで帰ってきたシスターは泣きべそかいて部屋の角で体育座りしている。
何があった？　いや、何もなかったのか？
「相手は見つかったのよ。でもね」
「相手は緊張しちゃってるし、ヘンリエッタは強ばっちゃって、ね？」
何となく想像はついた。告白もできずに何も話せなくてその場を後にしたんだな。
……もしやナカーマ？
「そもそも告白って緊張しないか？」
「そう言えばそんな話も聞いたことがあるわね」
「えっ、そうなのっ？」
焔はいつもオープンだから分からないだろうけど普通はそうなんだよ。
「自分の気持ちを伝えるだけなのに何故あんなにも緊張するんだ？　心臓はバクバクいって止まらないし、速く止まれ速く止まれ速く止まれ速く止まれ……」
「焔、シスター羽交い締めにして」
「分かったっ」
「は、離せっ！　私はこの五月蠅い心臓を止めなければいけないんだっ！」
「全く、少しは落ち着きなさい」
「クペッ」
雷、その首折りは酷いと思うんだ。確かにシスターの自殺は止めら

れたかもしれないけどもうちょい方法は選んで。

「あなたの要求は難しいわ」

どこがだ。

「じゃあ俺が熱血戦闘員の気持ちを聞いてきてやろう」

「へ？」

「直接聞くんじゃなくてシスターのことをどう見てるのかを聞くだけだ。好きかどうかまで聞く気はないぞ」

そこまで出歯亀精神には溢れてない。正直面倒だしな。

「ま、待て！」

ここまで来て往生際が悪いな。

「わ、私も聞く」

あ、そっちですか。

さっさと熱血戦闘員の気持ち（？）を聞くために教会支部を尋ねたら砂浜に居ると言われた。岩場で自主練しているらしい。

で、見つけた。

「こんちわ」

「うわっ！」

「そんなに驚かれると傷つくな」

あと危ないぞ。岩場でコケて頭打ったらシャレにならないし。

「ちょっと聞きたかったんだけどさ、あんたとシスターって同僚だったのか？」

直球は聞き耳立ててるシスターの心臓に悪そうなので避ける。

まあ次の質問は直球になるかもしれんが。

「シスター？　王女のことか……そうだ」

苦い顔してんな。

「いつも、訓練のときに皆に差し入れしてくれて、別にそんな義務ないのに、口調は男っぽいけど、優しくて」

ほうほう。

「急に王女だって言われても、前の、彼女との、気安い関係は心地よかった……僕が壊したのは分かってる！　でも、どうしようもない」

はあはあ。

「じゃあ聞くが、シスターが前みたいに話したいって言ったらどうするんだ？」

「王女がそう言ったのか？」

「質問に質問で返すなよ。ただシスターが不景気な顔してるからそうなのかと思っただけだ」

「そうか……できることなら、前みたいに話したいな」

言質とったで、シスターはん！
何で大阪弁やねん。
さて、どうしたものか。

6話　面倒な交渉は安息（後書き）

凍「このお話は」
焔「私とっ」
雷「私の」
焔&雷「恋愛相談でお送りしました～」

雷「私のキャラじゃないわね」
凍「自覚はあるんだな」
焔「大丈夫っ、雷も恋したら平気なキャラになるって！」
雷「恋、しなくちゃいけないのかしら……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6772z/

フェンリルさん頑張る

2012年1月11日02時50分発行